

QTシリーズ 使徒言行録

～1週目～

<1日目>

使徒1：1－5

テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。」

解説：使徒言行録はルカの福音書の続きと考えるのもよいでしょう。ルカの福音書はイエスが行ったこと、そして教えたことが記録されています。使徒言行録は使徒が行ったこと、又は教えたことの記録と考えるのもよいですが、それよりも聖霊の行いと聖霊によって教えられた記録と考える方がよいかもしれません。5節には父の約束された、賜物（Gift）を待ちなさい、ということが命じられています。

5節（英語 N I V） "Do not leave Jerusalem, but wait for the gift my Father promised, which you have heard me speak about.

ヨハネの福音書14：16－17

わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。

解説：

皆さんはバプテスマを受けた時に賜物として聖霊をいただきました。あなたの心に宿る聖霊を少し意識してみてください。

質問：

聖霊があなたの人生においてどのように働いてきましたか？聖霊によって変えられたこと、又は助けられたエピソードを思い出してください。今聖霊があなたに何を語っているか、どのようにあなたに促しているかを考えてみましょう。

< 2 日目 >

使徒 1 : 6 - 11

さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。イエスは言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

解説：

聖霊が降ることによって、福音が世界中に広がるという神様の夢が実現することになります。聖霊があなたと共にいます。聖霊の力によって福音が「地の果て」まで届くことを祈りましょう。

質問：

あなたが特に教会又は学び会を始めたい都市や地域がありますか？その場所はあなたにとって、何か特別な思いがありますか？そこにいつか教会が建てられることを夢見ながら祈ってみてください。

< 3 日目 >

使徒 1 : 12 - 15

使徒たちは、「オリーブ畑」と呼ばれる山からエルサレムに戻って来た。この山はエルサレムに近く、安息日にも歩くことが許される距離の所にある。彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。百二十人ほどの人々が一つになっていた。

解説：

神様はエルサレムで聖霊を送ることを約束しました。それまでは少し離れていた「オリーブ畑」に滞在していましたが、神様の約束を信じてエルサレムに行き、熱心に祈り続けて、祈

りの答えを待っていました。エルサレムに戻った行動そのものが彼らの信仰の証でした。彼らはできることをやりました。祈り続け、集まり続け、そしてユダの代わりとなる使徒も選びました。今皆さんが毎日、コロナウイルスの消息と世界中の人々のために祈っています。今の段階ではこれからの行き先が見えない、不安な時期が続いていますが、いつかこの問題は解決されます。

質問：

今この状況の中で、何ができますか？そしてコロナウイルスが消息したら具体的にどのようなことをしたいですか？誰とどのような時間を過ごしたいですか？どのように福音を伝えたいですか？祈りながら、神様が必ず答えてくださることを信じましょう。そしてまた教会として集まれるようになったら、どのようになれるかを夢見ながら、信じながら祈りましょう。

<4日目>

使徒2：1－13

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語るままに、ほかの国々の言葉で話した。さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポンロス、アジア、フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。

使徒2：16－18

そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの僕やはしのためにも、そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。

解説：

五旬祭の日に、ここにいたことを想像してください。もしこのような形で聖霊が降り、あなたも異国の言葉を語れるようになればどう思いますか？実はこの出来事はイエスが十字架に掛かってから一ヶ月しか経過していなく、弟子達の中ではその時の苦しい思いは心に残っていたはずですが、しかし、このような危機的な状況の中でも神様は新しい幻、夢を与えようとしています。

質問：

あなたは長年どのような御国の夢を持ってきましたか？叶えられた夢はありますか？最近の夢は何ですか？今は難しい状況だったとしても、神様は「いつか」それを素晴らしい夢に変えてくださいます。

< 5 日目 >

使徒 2 : 22 - 24

イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおりのことです。このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまっただけです。しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。

解説：福音のメッセージの中心的なものとは、イエスが十字架に架かり、復活したことです。このメッセージは不変のメッセージです。不安定な今だからこそ、この不動なメッセージに心を向けていきましょう。

使徒 2 : 26 - 29

だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかない。あなたは、命に至る道をわたしに示し、御前にいるわたしを喜びで満たしてください。』兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。

解説：

十字架と復活のメッセージに使徒ペテロは詩篇 16 : 8 を引用してダビデの言葉を結びつけ

ます。ペテロにとっては十字架と復活のメッセージは喜びであり、希望でした。神様が自分を見捨てないというメッセージであり、神様の力を語るものでした。

質問：

自分にとってイエスの十字架と復活はどのような意味がありますか？十字架と復活によってどのように希望が与えられていますか？これによって伝わる神様からのメッセージとは何ですか？よく考えて書き出してください。

<6日目>

使徒2：36－41

だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。

質問：

自分のバプテスマの日を思い出してください。どのように心が打たれ、どのように罪に砕かれていましたか？バプテスマを受けた時にどのように感じましたか？その日、神様に何を約束しましたか？もう一度神様に約束したことを思い出し、神様のために生きる思いを固めていきましょう。

<7日目>

使徒2：42－47

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業とするしが行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民

衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

解説：

この姿は私たちが小グループや教会として目指している姿です。この聖句を自分の小グループに照らし合わせてください。どの点で成長したいですか？今コロナ対策により全員で集まらない状況において、何ができますか？一緒に集まることはできませんが、聖書を読んだり、たくさん祈ったり、インターネットを通じて励まし合うことができます。できることを熱心になっていきましょう。

質問：

再び集まれるようになったら、どのような学び会になっていることを望みますか？

～ 2 週目～

<1 日目>

2020年4月12日の説教を振り返り、深めましょう。
特に心に残った聖書の箇所を読み返しましょう。

質問：

①何を最も学びましたか？

神様があなたに何を語りかけてくださっていると思いますか？

②今週、具体的に何を決心し、実践したいですか？

神様に頼り、イエスの十字架と復活に動機づけられ、できることを精一杯やっていきましょう。

<2 日目>

使徒 3：1－10

ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。その男が、何かもらえると思って二人を見つめていると、ペトロは言った。
「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。

解説：

3章から4章では、使徒たちと誕生したばかりの教会を通して、聖霊によってイエスの働きと福音が広められる姿が記録されています。足の不自由な男を見て、ペトロはイエスと同じ心で憐れられました。しかし、ペトロは自分の力では癒せないと理解していました。ペトロは、イエスの名（権威を意味する）によって、イエスが行われた奇跡を継続し、人を癒しました。癒された男性は歩きながら、神様を賛美しました。

質問：

①今、誰をイエスと同じ思いで憐れんでいますか？

②彼らのために、あなたが持っているもので、何を与えることができますか？

今週、自分が持っているものを精一杯用いて、イエスの憐みを実践していきましょう。

< 3 日目 >

使徒 3 : 11 - 16

さて、その男がペトロとヨハネに付きまどっていると、民衆は皆非常に驚いて、「ソロモンの回廊」と呼ばれる所にいる彼らの方へ、一斉に集まって来た。これを見たペトロは、民衆に言った。「イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。また、わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見つめるのですか。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました。ところが、あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようと決めていたのに、その面前でこの方を拒みました。聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。あなたがたは、命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。あなたがたの見て知っているこの人を、イエスの名が強くしました。それは、その名を信じる信仰によるものです。イエスによる信仰が、あなたがた一同の前でこの人を完全にいやしたのです。

解説：

ペトロは、ペトロ自身の力で男性を癒したと思って驚いている民衆に対して、イエスを復活させた神様の力によって癒されたことを伝えました。ペトロは民衆の関心を自分自身ではなく、イエスに向けようとしてしました。イエスを信じる信仰を通して、イエスが男性を強くし、完全に癒してくださいました。

質問：

①イエスへの信仰によって、あなたはどのように強くなり、癒されてきましたか？

また、今、どのように強められたいですか？

②今、誰にイエスによって強められ、癒されて欲しいですか？

具体的に考え、書き出してみて、自分と那些人たちのために祈りましょう。

< 4 日目 >

使徒 3 : 17 - 21、26

ところで、兄弟たち、あなたがたがあんなことをしてしまったのは、指導者たちと同様に無知のためであったと、わたしには分かっています。しかし、神はすべての預言者の口を通して予告しておられたメシアの苦しみを、このようにして実現なされたのです。だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。 こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。

それで、神は御自分の僕を立て、まず、あなたがたのもとに遣わして下さったのです。それは、あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その祝福にあずからせるためでした。」

解説：

キリストに信仰を置くことは、必ず悔い改めを伴います（慰めは、ギリシャ語ではリバイバル、英語ではリフレッシュ、回復、生き返る、という意味があります。使徒2:38と同じメッセージが語られ、聖霊が与えられることと同義で使われています）。悔い改めには、罪の赦し、慰め、回復の約束があり、祝福にあずかることができると約束されています。神様はキリストを送るはるか前から計画を立て、キリストの十字架と復活によって約束を実現してくださいました。

質問：

- ①悔い改めによって、どのような慰め、回復、祝福が与えられましたか？
 - ②今、何を悔い改め続けていますか？その先に、どのような慰め、回復、祝福を信じますか？
- 神様は必ず慰め、回復、祝福の時を与えてくださいます。
希望を持ち、自分にも、他の人にも悔い改めを期待し、実践し続けましょう。

< 5日目 >

使徒4：1－14、18－20

ペトロとヨハネが民衆に話をしていると、祭司たち、神殿守衛長、サドカイ派の人々が近づいて来た。二人が民衆に教え、イエスに起こった死者の中からの復活を宣べ伝えているので、彼らはいらだち、二人を捕らえて翌日まで牢に入れた。既に日暮れだったからである。しかし、二人の語った言葉を聞いて信じた人は多く、男の数が五千人ほどになった。次の日、議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった。大祭司アンナスとカイアファとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。そして、使徒たちを真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか」と尋問した。そのとき、ペトロは聖霊に満たされて言った。「民の議員、また長老の方々、今日わたしたちが取り調べを受けているのは、病人に対する善い行いと、その人が何によっていやされたかということについてであるならば、あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただ

きたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。この方こそ、『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、隅の親石となった石』です。ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」議員や他の者たちは、ペトロとヨハネの大胆な態度を見、しかも二人が無学な普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であるということも分かった。しかし、足をいやしていただいた人がそばに立っているのを見ては、ひと言も言い返せなかったそこで、二人に議場を去るように命じてから、相談して、言った。「あの者たちをどうしたらよいだらう。彼らが行った目覚ましいしるしは、エルサレムに住むすべての人に知れ渡っており、それを否定することはできない。しかし、このことがこれ以上民衆の間に広まらないように、今後あの名によってだれにも話すなと脅しておこう。」そして、二人を呼び戻し、決してイエスの名によって話したり、教えたりしないようにと命令した。しかし、ペトロとヨハネは答えた。「神に従わないでああなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。」

解説：

ペトロはイエスを十字架にかけた人々を前に、迫害や脅しに屈することなく、聖霊に満たされて大胆に語りました（50日前に、まさに彼らをペトロは恐れ、イエスを3度否定しました）。ペトロとヨハネは無学で普通の人に見えました。しかし、彼らはイエスと共にいて、聖霊に満たされた人々であり、彼らを通して神様は教会を建て、世界を変える計画を持っていました。

質問：

- ①今、どのような恐れがありますか？
 - ②聖霊に満たされて、大胆になれた経験を思いだし、書き出してみてください。
 - ③聖霊に満たされ、福音を大胆に伝えて歩むために、何が必要でしょうか？
- 聖霊に満たされ、神様に従って歩みましょう。

< 6日目 >

使徒4：23－31

さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを残らず話した。これを聞いた人たちは心をつにし、神に向かって声をあげて言った。「主よ、あなたは天と地と海と、そして、そこにあるすべてのものを造られた方です。あなたの僕であり、また、わたしたちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。『なぜ、異邦人は騒ぎ立ち、諸国の民はむなしいことを企てるのか。地上

の王たちはこぞって立ち上がり、指導者たちは団結して、主とそのメシアに逆らう。』 事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民と一緒にあって、あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らいました。そして、実現するようにと御手と御心によってあらかじめ定められていたことを、すべて行ったのです。主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、思い切って大胆に御言葉を語るができるようにしてください。どうか、御手を伸ばし聖なる僕イエスの名によって、病気がいやされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください。」 祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。

解説：

釈放されたペトロとヨハネは、弟子たちの元に帰って、迫害や脅しについて残らず伝えました。弟子たちは難しい、恐れる状況の中でさらに心を一つにし、神様に頼り、御言葉に信頼し（詩編2章を引用しています）、大胆さを求めて祈りました。祈り終わると、弟子たちは聖霊に満たされ、大胆に神様の言葉を語りました。

質問：

①危機・困難な状況にどのように反応していますか？

信頼できる兄弟姉妹に伝え、共に祈りますか？

御言葉の約束を探し、祈り求めますか？

②今、神様にどのように働いて欲しいですか？

困難な状況の時ほど、弟子たちは一つになり、神様に頼り、必死に祈り求めました。

神様は必ず、このように祈り求める教会に答えてくださいます。

心を合わせて、祈りましょう。

< 7日目 >

使徒4：32－37

信じた人々の群れは心も思いも一つにし、一人として持ち物を自分のものだと言う者はなく、すべてを共有していた。使徒たちは、大いなる力をもって主イエスの復活を証しし、皆、人々から非常に好意を持たれていた。信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ——「慰めの子」という意味——と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた。

解説：

弟子たちは心も思いも一つにし、誰も貧しい人がいないほどに互いに持ち物を分け合い、具

体的にニーズを満たし、愛し合っていました。そして、周りの人々も弟子たちに好意を抱くほど、彼らの関係とメッセージは魅力的でした。

質問：

①小グループや周りの兄弟姉妹で、特にケアや励ましを必要としている人はいますか？

何を分け与えることができますか？

②この状況の中で、どのようにクリスチャンでない友達にインパクトを与えることができますか？具体的に考え、祈り、実践していきましょう。

～ 3 週目～

<1 日目>

使徒 5 : 1 - 11

ところが、アナニアという男は、妻のサフィラと相談して土地を売り、妻も承知のうえで、代金をごまかし、その一部を持って来て使徒たちの足もとに置いた。すると、ペトロは言った。「アナニア、なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか。売らないでおけば、あなたのものだったし、また、売っても、その代金は自分の思いどおりになったのではないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」この言葉を聞くと、アナニアは倒れて息が絶えた。そのことを耳にした人々は皆、非常に恐れた。若者たちが立ち上がって死体を包み、運び出して葬った。それから三時間ほどたって、アナニアの妻がこの出来事を知らずに入って来た。ペトロは彼女に話しかけた。「あなたたちは、あの土地をこれこれの値段で売ったのか。言いなさい。」彼女は、「はい、その値段です」と言った。ペトロは言った。「二人で示し合わせて、主の霊を試すとは、何としたことか。見なさい。あなたの夫を葬りに行った人たちが、もう入り口まで来ている。今度はあなたを担ぎ出すだろう。」すると、彼女はたちまちペトロの足もとに倒れ、息が絶えた。青年たちは入って来て、彼女の死んでいるのを見ると、運び出し、夫のそばに葬った。教会全体とこれを聞いた人は皆、非常に恐れた。

解説：

5章の最初は「ところが」から始まります。これは4章を受けてのことです。バルナバを含め、初代教会の土地や家を持っている弟子は皆、それを売って代金を持ち寄り分け合っていました。アナニアとサフィラも一見同じことをしたように見えたが、そうではありませんでした。

3節でペトロが言うように、売らないでおけば土地はそのまま自分たちのものだし、売っても、これだけ献げます、と自分で金額を決めて出すこともできたのです。

しかし、アナニアたちは、売った代金の一部を自分たちのものにして、しかし献げる時には、売った代金すべてを献げたことにしたのです。代金をごまかし、嘘をつきました。

2節と3節に出てくる「ごまかす」という言葉は、原語のギリシャ語では「nosphizomai」という単語で、これはもともと「着服する」という意味で、テトス2章10節でも使われますが、ここでは「盗む」と訳されています。アナニアとサフィラの行動は”神様のものであった代金を盗んで自分たちのものにした”とも考えられます。神様がどうしてこの夫婦の息を引き取らせたか、最終的には神様にしか分かりませんが、明らかにアナニアとサフィラには「罪」がありました。私たちは罪に対して軽く考えることはできません。

質問：

アナニアとサフィラにはどのような「罪」があったと思いますか？

人によく思われたい 自己中心の罪

あなたはどのような時に「ごまかす」誘惑を感じます？

自分が悪くなる時

私たちの「罪」を贖うために十字架にかかってくださったイエスに感謝の祈りを捧げましょう。

今日「悪霊」で心を満たされることがないように「聖霊」で心を満たしましょう。

< 2日目 >

使徒5：27－32

彼らが使徒たちを引いて来て最高法院の中に立たせると、大祭司が尋問した。「あの名によって教えるはならないと、厳しく命じておいたではないか。それなのに、お前たちはエルサレム中に自分の教えを広め、あの男の血を流した責任を我々に負わせようとしている。」ペトロとほかの使徒たちは答えた。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました。神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証ししておられます。」

解説：

この辺りはまるで小説かのようにドラマチックな展開をしていきます。大祭司とサドカイ派の人々は妬みから使徒たちを捕らえ投獄しました。しかし、天使によって使徒たちは牢屋から脱出し、なおもエルサレムの境内で福音を述べ伝えました。大祭司は諦めず使徒たちを引き立てさせ、最高法院で彼らを尋問します。厳しく自分たちの命令に従うように言いますが、ペテロや他の使徒たちは大胆にイエスの証人として証します。それは使徒たちが「人間ではなく神に従う」ことを徹底していたからだということがわかります。

使徒5章ではこの29節と同じように、4節、また38－39説でも「人間と神」という比較が出てきます。私たちも見える人に目を向けるのではなく、見えないけど力強い神様に目を向けましょう。

質問：

使徒と同じように私たちも「イエスの証人」であり、私たちがいただいた聖霊もイエスを証しています。あなたに神様を見えにくくさせる「人」もしくは「人間的な力」はありますか？それはなんですか？書き出し、プロセスしましょう。また、親しい兄弟姉妹に話し、健全な声を聞かせてもらい、神様に目を向けられるように助けてもらいましょう。

うまくできないという声 休みたい、疲れている、眠たい という思い
何かをすればうまくいかない 怒られる という予測
思い悩みが神様を見えなくさせる 過去の父・母・兄たちの声 ちゃんとできないと怒られる
ため ダサい プレッシャーがあった 過去の家族という人たちは僕に神様を見せなくさせる傾向がある 全てじゃないけど
毎日それがある 毎朝それと戦う 本当に嫌だ 従うというのは心 彼が万物の王様 イエスの方が強い 家族の声は今でも聞こえるけど、今日も御言葉を信じ、王の元へ帰っていく

< 3日目 >

使徒 6 : 1 - 7

そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」一同はこの提案に賛成し、信仰と聖霊に満ちている人ステファノと、ほかにフィリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、アンティオキア出身の改宗者ニコラオを選んで、使徒たちの前に立たせた。使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた。こうして、神の言葉はますます広まり、弟子の数はエルサレムで非常に増えていき、祭司も大勢この信仰に入った。

解説：

弟子の数はますます増えていき、1世紀の教会はさらに大きくなりました。その中で、ギリシア文化の影響を深く受けている弟子と、生粋のユダヤ人たちとの間で日々の食事の問題が起きました。言葉や文化の違いから分裂の危機がありました。

使徒たちはこの問題を解決するために全員の弟子を集めて選任させます。執事の選出とも言われる箇所です。6章・7章・8章で多く書かれる「ステファノ」と「フィリポ」がここで初めて聖書に名前が出てきます。選ぶ条件は「知恵」に満ちていることもありましたが、それよりもまず最初に「霊」に満ちていることが重要でした。

質問：

使徒たちが問題解決を図る時に一番大事にしたのは「霊」の働きでした。今日、あなたにはどのような問題がありますか？その問題を解決するためにどれだけ祈り、聖書を読み、交わりを持っているでしょうか。今日、知恵ではなく、まず「霊」に頼りましょう。親しい兄弟姉妹に問題を分かち合い共に祈り聖句を分かち合いましょう。

また、1世紀の教会はこの問題が解決された後、さらに成長し、あの祭司でさえも大勢弟子になりました。問題の後には必ず成長があります。

もしその問題が解決されたらどのようになるでしょうか？その未来を思い描いてみましょう。

< 4日目 >

使徒7：1－8

大祭司が、「訴えのとおりか」と尋ねた。そこで、ステファノは言った。「兄弟であり父である皆さん、聞いてください。わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、『あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け』と言われました。それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハランに住みました。神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、そこでは財産を何もお与えになりませんでした、一步の幅の土地さえも。しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と約束なされたのです。神はこう言われました。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』そして、神はアブラハムと割礼による契約を結ばれました。こうして、アブラハムはイサクをもうけて八日目に割礼を施し、イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長をもうけて、それぞれ割礼を施したのです。

解説：

6章の最後でステファノは最高法院に引き立てられ、訴えられます。7章からはステファノの弁明が始まります。このステファノの弁明である説教は53節まで続いていきます。使徒言行録の中では最も長い紙面をさいて記録されています。それはこのステファノの説教と殉教という出来事が大きな転換点になったからではないかと思われます。それまでユダヤ教の一部として許容されてきた弟子たちの教会は、ここからさらに激しい迫害を受け、各地に散っていくことになりました。

ステファノの説教の内容は「アブラハムの召命と割礼による契約」（2－8）、「ヨセフ物語と、エジプトへの移動」（9－16）、「モーセの誕生と逃亡」（17－29）、「モーセの召命と荒野での不従順」（30－43）、「幕屋と神殿」（44－50）、「告発」（51－53）と整理することができます。

ステファノはイスラエルの歴史を辿りながら、神様が約束を守られる方であり、常に共に居て導き続けてくださる方であることを説明していきます。また、歴史の中で何度もイスラエルの民は預言者を退け反抗してきたことを明らかにし、イエスに対しても同じ態度をとっていることを説明します。

質問：

イスラエルの歴史のどの段階、どの場面、どの舞台をとってみても、神様は共に居て力強く導き続けました。同じ神様が私たちの人生にも居てくださいます。

神様はあなたの個人的な人生にどのように働いてくれましたか？思い出しましょう。

ノートに書き出して、今日神様の働きに目をむけましょう。

< 5 日目 >

使徒 7 : 5 4 - 6 0

人々はこれを聞いて激しく怒り、ステファノに向かって歯ざしりした。ステファノは聖霊に満たされ、天を見つめ、神の栄光と神の右に立っておられるイエスとを見て、「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える」と言った。人々は大声で叫びながら耳を手でふさぎ、ステファノ目がけて一斉に襲いかかり、都の外に引きずり出して石を投げ始めた。証人たちは、自分の着ている物をサウロという若者の足もとに置いた。人々が石を投げつけている間、ステファノは主に呼びかけて、「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」と言った。それから、ひざまずいて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と大声で叫んだ。ステファノはこう言って、眠りについた。

解説：

ステファノはキリスト教最初の殉教者といわれています。

石打の刑の中で、ステファノの態度は私たちにイエスを思い起こさせます。実際ステファノの言葉はイエスの十字架上の言葉と似ています。

ルカによる福音書 2 3 : 4 6

イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。

ルカによる福音書 2 3 : 3 4

〔そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのかわからないのです。】人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。

ステファノのこの祈りは神様に聞き届けられます。後のパウロであるサウロがこの場にいる事が聖書に書かれています。サウロは、ステファノの説教を聞いた後も、迫害を続け、そしてダマスコに行く途中でイエスと出会います。

質問：

あなたがバプテスマを受ける時にどのような罪をイエスに赦してもらいましたか？

赦されることは、あなたの人生にどのような影響を及ぼしましたでしょうか？

今年あなたが赦すことを取り組みたい人はいますか？書き出し、祈ることから始めてみましょう。

< 6日目 >

使徒 8 : 1, 4 - 8

サウロは、ステファノの殺害に賛成していた。 その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒たちのほかは皆、ユダヤとサマリアの地方に散って行った。 さて、散って行った人々は、福音を告げ知らせながら巡り歩いた。 フィリポはサマリアの町に下って、人々にキリストを宣べ伝えた。 群衆は、フィリポの行うしるしを見聞きしていたので、こぞってその話に聞き入った。 実際、汚れた霊に取りつかれた多くの人たちからは、その霊が大声で叫びながら出て行き、多くの中風患者や足の不自由な人もいやしてもらった。 町の人々は大変喜んだ。

解説：

ステファノの殺害後、エルサレムの教会に対して大迫害が起こり、使徒たち以外の弟子たちは別々の場所に散らされます。

信頼していたステファノの死への悲しみもありました。

しかし、散って行った人々はそれぞれの地で福音を宣べ伝えていきます。

フィリポはサマリアの町で多くの人の悪霊を追い出し、病を癒しキリストを宣べ伝えました。

質問：

①今私たちもコロナの影響で中々集まることができず、世界では多くの人が苦しみ、亡くなり深い悲しみもあります。

当時のエルサレムの教会と同じような状況かもしれません。なぜフィリポは逆境とも思える状況の中でこのような行動をすることができたのでしょうか。

ここで出てくるフィリポは使徒言行録 6:1-5 で選出されたギリシア語を話すユダヤ人 7 人のうちの一人とされています。ここでは霊と知恵に満ちた評判の良い人と書かれています。私たちも神様の霊に満たされることを祈り、求めましょう。

②フィリポは苦しみの中でも、キリストの十字架の愛、罪の赦しを伝え続けました。

あなたは誰に伝えたいですか？

今あなたの心に思い浮かんだ人にどのように神様の愛を伝えることができるか、考えてみてください。

< 7日目 >

使徒 8 : 26 - 31

さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。 フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチ

オピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。すると、“霊”がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒にいけ」と言った。フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。

解説：

フィリポは主の天使に、ガザへ下る道へ行くように言われます。一見寂しい道でしたが、従いました。そこへエチオピア人の宦官が通りがかります。そこでまた霊がフィリポへ馬車を追いかけて走り、共に行くように指示を出します。無謀にも思える指示でしたが霊に従い、この後宦官はバプテスマを受けます。

質問：

①フィリポは一人にいるようで、実はいつも神様がフィリポと共におられ、一緒に働いてくださっていました。今日フィリポと同じようにあなたとも神様が共におられます。そう思うとどのような気持ちになりますか。

②フィリポはいつも主の言葉、霊の言葉に耳を傾けていました。

今日、再び聖霊の声に耳を傾けてみましょう。神様はあなたにどこへ行き、誰に福音を宣べ伝えるように語られていますか。その人が救われることを夢見て、その人に電話をしたり、ラインを送ったり、特別に祈ったり、何か小さいことでも良いので具体的に、神様と共に一歩踏み出し行動してみましょう。

～ 4 週目～

<1 日目>

使徒 9 : 1 - 9

さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

解説：

この箇所は歴史上最も有名なパウロの回心の話です。パウロの仕事はエルサレムにいるキリスト者を迫害することでした。この時パウロは、およそ 100Km 歩いて 1 週間ほどかけてダマスコという地域まで、まるで仇打ちにでも行くかのような激情に駆られていました。ところが、パウロはダマスコに入る手前で復活したイエスと出会い、光を浴びて盲目となり、自分では何もできない弱い者になって、人々に手を引かれながらダマスコに入りました。パウロのこれまでの人生は自分がやりたいこと、自分が良いと思うことを自分の意思で決めて実行してきました。回心されて以降は、自分でしたいことをする人生ではなく、キリストに従う人生を突き進みました。

質問：

- ①あなたは回心によってどのように人生が変えられましたか？
- ②今週神様があなたに期待することは何でしょうか？イエスと共に取り組むミッションを祈り求めましょう。

<2 日目>

使徒 9 : 10 - 19

ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者

を訪ねよ。今、彼は祈っている。アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、食事をして元気を取り戻した。

解説：

アナニアはパウロの悪い評判を当然知っていました。「アナニアを捉え、殺そうと思っているパウロの手助けをなさい」と神様から言われて、気狂いざただと思ったに違いありません。しかし、アナニアは神様に反撃や文句を言わず従いました。アナニアは初めてパウロに会った時、歓迎に満ちて「兄弟サウロよ！」と呼びかけました。愛と赦しに満ちたキリスト者としての模範です。

質問：

①あなたを迫害したり、傷つけようとする人はいますか？

まず、その人が回心されるように、その人を愛せるように祈りましょう。

②あなたの神様を信頼する心は10点満点中 何点ですか？

信頼できる部分と信頼できない部分の理由を書き出してみましょう。

< 3日目 >

使徒9：26－31

サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた。しかしバルナバは、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって大胆に宣教した次第を説明した。それで、サウロはエルサレムで使徒たちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに教えるようになった。また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた。それを知った兄弟たちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ出発させた。

こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰

めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えていった。

解説：

エルサレムこそ、パウロが教会を荒らし回り男女にかかわらず捕らえて牢に入れた、まさにその都市。ほとんどの弟子がパウロを信じきれず避ける中で、バルナバがパウロを信じて手を取り後ろ盾となってくれた。パウロのような人物を信じることは誰でも難しい。人はたった一度のあやまちでも永久に避難されることがある。バルナバはキリスト者として素晴らしい愛をパウロに示した。過去の罪に根をも持たないことこそ神様の愛である。

タルソスはパウロの故郷である。パウロの人が変わったこと、イエス・キリストが自分を変えてくださったことを故郷で伝えた。

質問：

①あなたが傷つけたり、裏切ったりしたのにもかかわらず、あなたを信じて助けてくれるのは誰ですか？

感謝を思い出しできれば感謝カードを書きましょう。

②パウロは九死に一生を得るような人生ですね。

どのようなところをパウロに倣いたいですか？

< 4 日目 >

使徒 10 : 1 - 9

さて、カイサリアにコルネリウスという人がいた。「イタリア隊」と呼ばれる部隊の百人隊長で、信仰心あつく、一家そろって神を畏れ、民に多くの施しをし、絶えず神に祈っていた。ある日の午後三時ごろ、コルネリウスは、神の天使が入って来て「コルネリウス」と呼びかけるのを、幻ではっきりと見た。彼は天使を見つめていたが、怖くなって、「主よ、何でしょうか」と言った。すると、天使は言った。「あなたの祈りと施しは神の前に届き、覚えられた。今、ヤッファへ人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。その人は、革なめし職人シモンという人の客になっている。シモンの家は海岸にある。」天使がこう話して立ち去ると、コルネリウスは二人の召し使いと、側近の部下で信仰心のあつい一人の兵士とを呼び、すべてのことを話してヤッファに送った。翌日、この三人が旅をしてヤッファの町に近づいたころ、ペトロは祈るため屋上に上がった。昼の十二時ごろである。

解説：

使徒 10 章は、異邦人の救いという教会の新たな転機について書かれています。その一つが百人隊長のコルネリウスです。彼の信仰と忠実さは形だけではなく、貧しい人々への施しや頻繁な祈りにも示されていました。コルネリウスは神様を畏れ、神様を求める人でした。なので神様も彼を見出し、彼の家族や周りの人々をも救いへと導いてくださいました。

質問：

- ①あなたにとって、「神を畏れる」とは具体的にどういうことでしょうか。
- ②あなたの家族や職場の人が救いに導かれるよう、「ステイホーム週間中」に何か一つ具体的な取組みを実践してみましょう。

< 5 日目 >

使徒 11：1－18

さて、使徒たちとユダヤにいる兄弟たちは、異邦人も神の言葉を受け入れたことを耳にした。ペトロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちは彼を非難して、「あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした」と言った。そこで、ペトロは事の次第を順序正しく説明し始めた。「わたしがヤッファの町にいて祈っていると、我を忘れたようになって幻を見ました。大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、天からわたしのところまで下りて来たのです。その中をよく見ると、地上の獣、野獣、這うもの、空の鳥などが入っていました。そして、『ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい』と言う声を聞きましたが、わたしは言いました。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は口にすることがありません。』すると、『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない』と、再び天から声が返って来ました。こういうことが三度あって、また全部の物が天に引き上げられてしまいました。そのとき、カイサリアからわたしのところに差し向けられた三人の人が、わたしたちのいた家に到着しました。すると、“霊”がわたしに、『ためらわないで一緒に行きなさい』と言われました。ここにいる六人の兄弟も一緒に来て、わたしたちはその人の家に入ったのです。彼は、自分の家に天使が立っているのを見たこと、また、その天使が、こう告げたことを話してくれました。『ヤッファに人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。あなたと家族の者すべてを救う言葉をあなたに話してくれる。』わたしが話しだすと、聖霊が最初わたしたちの上に降ったように、彼らの上にも降ったのです。そのとき、わたしは、『ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました。こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたのでしょうか。」この言葉を聞いて人々は静まり、「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」と言って、神を賛美した。

解説：

ペトロ自身、またペトロの話聞いた使徒たちとユダヤにいる兄弟たちも自分たちの価値観を変えられる必要がありました。それはユダヤ人の特権意識、異邦人との接触禁止、厳しい食物制限など取るに足らない戒律やタブーを自分の中で廃止することです。初代教会は、障害になるモノを取り壊すという特徴がありました。それによって、異邦人の救いという新し

い扉を神様が開かれようとしていたからです。

質問：

- ①コロナの蔓延によって先が見えない状況が続く中、神様はあなた自身が作り変えられることで、教会をどのような新しいステージに導こうとしているのでしょうか。
- ②神様の新たな計画を見ることを妨げる自分自身が作り上げている律法やルール、また厳密な基準は具体的に何でしょうか。

< 6日目 >

使徒 11 : 19 - 26

ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった。しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。

主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった。

このうわさがエルサレムにある教会にも聞こえてきたので、教会はバルナバをアンティオキアへ行くように派遣した。バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。多くの人が主へと導かれた。バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである。こうして、多くの人が主へと導かれた。それから、バルナバはサウロを捜しにタルソスへ行き、見つけ出してアンティオキアに連れ帰った。二人は、丸一年の間その教会に一緒にいて多くの人を教えた。このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。

解説：

アンティオキアは世界で三番目に大きな国際都市したが、不道徳でだらしない町として軽視されてきました。そこにキプロス島やキレネから来た名もなき者たちが、自発的に福音を伝えていきました。このような都市から、キリスト教が世界への第一歩を踏み出しました。神様の計画は、人の考えや思いをはるかに超えています。

質問：

- ①なぜ、神様はバルナバをアンティオキアの教会へ送ったのでしょうか。また、バルナバはなぜタルソにサウロを探しに行ったのでしょうか。
- ②不道徳で罪が多いアンティオキアを、神様はキリスト教の中心の地にしていくという奇跡を行いました。あなたにとって難しいと思われる状況、希望を持ってないような状況はありますか。神様はそれをどのように変え、神様の栄光にしていくことができますか。

< 7日目 >

使徒 12 : 1 - 11

そのころ、ヘロデ王は教会のある人々に迫害の手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。そして、それがユダヤ人に喜ばれるのを見て、更にペトロをも捕らえようとした。それは、除酵祭の時期であった。ヘロデはペトロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。過越祭の後で民衆の前に引き出すつもりであった。こうして、ペトロは牢に入れられていた。教会では彼のために熱心な祈りが神にささげられていた。ヘロデがペトロを引き出そうとしていた日の前夜、ペトロは二本の鎖でつながれ、二人の兵士の間で眠っていた。番兵たちは戸口で牢を見張っていた。すると、主の天使がそばに立ち、光が牢の中を照らした。天使はペトロのわき腹をつついて起こし、「急いで起き上がりなさい」と言った。すると、鎖が彼の手から外れ落ちた。天使が、「帯を締め、履物を履きなさい」と言ったので、ペトロはそのとおりにした。また天使は、「上着を着て、ついて来なさい」と言った。それで、ペトロは外に出てついて行ったが、天使のしていることが現実のこととは思われなかった。幻を見ているのだと思った。第一、第二の衛兵所を過ぎ、町に通じる鉄の門の所まで来ると、門がひとりでに開いたので、そこを出て、ある通りを進んで行くと、急に天使は離れ去った。ペトロは我に返って言った。「今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださったのだ。」

使徒 12 : 21 - 24

定められた日に、ヘロデが王の服を着けて座に着き、演説をすると、集まった人々は、「神の声だ。人間の声ではない」と叫び続けた。するとたちまち、主の天使がヘロデを撃ち倒した。神に栄光を帰さなかったからである。ヘロデは、蛆に食い荒らされて息絶えた。神の言葉はますます栄え、広がって行った。バルナバとサウロはエルサレムのための任務を果たし、マルコと呼ばれるヨハネを連れて帰って行った。

解説：

大迫害の波が襲ってきている中、ペテロの投獄は絶体絶命と思えた。1組4人が3時間交代で監視した。ペテロの両腕は左右それぞれ監視人と鎖で繋がれ、2人が戸口の見張りをしていった。律法により、逃げられた監視人はペテロの代わりに処刑された。注目したいのは、ペテロのために弟子たちが教会に集まり熱心な祈りが捧げられていたこと。そして、群衆はヘロデ王を神だと叫んだ直後に神様はヘロデを打ち倒した。蛆に食い荒らされて息絶えるとは、人間の傲慢さに対する神様の怒り表している。

質問：

①窮地から救われた体験を思い出しましょう。もし、今が窮地であるなら、熱心に祈ってもらいましょう。

②あなたが捨てたい罪はなんですか？告白して兄弟または姉妹と一緒に祈りましょう。

～ 5 週目～

<1 日目>

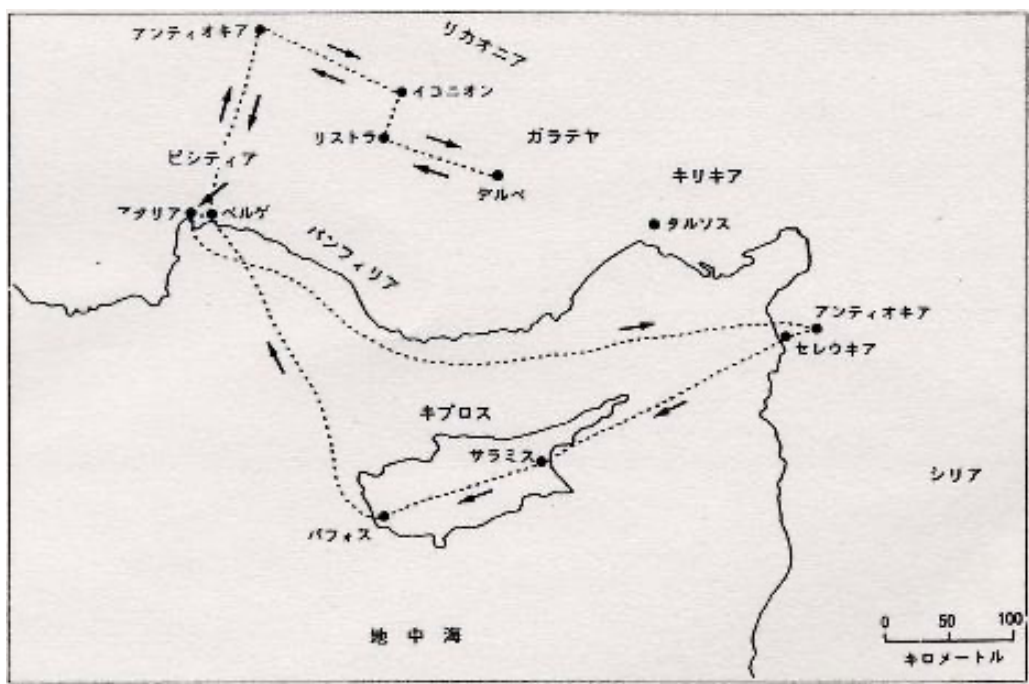
使徒 13 : 1 - 3

アンティオキアでは、その教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。「さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出さない。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。

解説：

この場面からバルナバとサウロの宣教の旅が始まります。教会は福音を全世界に伝えることを始めていきました。始まりは主に礼拝し、断食しているところに聖霊が告げ知らせたことがきっかけでした。そのため、この宣教旅行は教会の人々が「自分たちが望むようにする」のではなく、「聖霊によって告げられていたこと」、「神様が望んでいること」でした。同時にこの宣教旅行という役割は、神様がバルナバとサウロにあらかじめ決めておられた仕事でした。その神様の思いに応え、バルナバとサウロは出発しました。アンティオキアから始まった宣教旅行の旅路は図 1 の通りでした。

(図 1：第一宣教旅行の旅路)



質問：

①旅に出発したバルナバとサウロはどのような思いだったのでしょうか？想像してみてください。旅に出発したバルナバとサウロのように、神様のために一歩踏み出す新しい挑戦を今日からしていきましょう。どのようなことができるのでしょうか？

②あなたにとって、「神様が決めていた仕事」はなんのでしょうか？今日そのことを考え、実行してみましょう。

< 2日目 >

使徒 13：4－12

聖霊によって送り出されたバルナバとサウロは、セレウキアに下り、そこからキプロス島に向け船出し、サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言葉を告げ知らせた。二人は、ヨハネを助手として連れていた。島全体を巡ってパフォスまで行くと、ユダヤ人の魔術師で、バルイエスという一人の偽預言者に会った。この男は、地方総督セルギウス・パウルスという賢明な人物と交際していた。総督はバルナバとサウロを招いて、神の言葉を聞こうとした。魔術師エリマ——彼の名前は魔術師という意味である——は二人に対抗して、地方総督をこの信仰から遠ざけようとした。パウロとも呼ばれていたサウロは、聖霊に満たされ、魔術師をにらみつけて、言った。「ああ、あらゆる偽りと欺きに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、お前は主のまっすぐな道をどうしてもゆがめようとするのか。今こそ、主の御手はお前の上を下る。お前は目が見えなくなって、時が来るまで日の光を見ないだろう。」するとたちまち、魔術師は目がかすんできて、すっかり見えなくなり、歩き回りながら、だれか手を引いてくれる人を探した。総督はこの出来事を見て、主の教えに非常に驚き、信仰に入った。

解説：

宣教旅行で初めてついた場所はキプロスでした。キプロスはローマが統治しており、銅鋌と船舶の建造で有名な都市でした。また宣べ伝え始めたパフォスはキプロスの首都でした。当時のキプロスには専属の魔術師を雇う文化がありました。総督であるセルギウス・パウルスのような教養がある人でも、占いや魔術、呪文を行う専属の占い師を雇っていました。それが魔術師エリマでした。エリマはセルギウス・パウルスが神様を信じることで自分の地位と立場が脅かされることを恐れ、セルギウス・パルスを信仰から遠ざけようとした。そこでサウロは聖霊に満たされて、エリマに神の御業を現していきます。

質問：

①宣べ伝えることを阻まれたバルナバとサウロとはどのような思いだったのでしょうか？今日あなたが誰かに信仰を伝えようとした時、あなたを阻む障害はなんですか？

②この場面を最後にサウロはパウロと書かれるようになり、また「バルナバとサウロ」という順番から「パウロとバルナバ」と順番が変わります。なぜそのようになったと思いますか？

パウロとバルナバの中にどのような心の変化があったと思いますか？今日あなたも何か心の変化が必要でしょうか？

< 3日目 >

使徒 13 : 13 - 51

パウロとバルナバが会堂を出るとき、人々は次の安息日にも同じことを話してくれるように頼んだ。集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神をあがめる改宗者とがついて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みの下に生き続けるように勧めた。

次の安息日になると、ほとんど町中の人々が主の言葉を聞こうとして集まって来た。しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたま、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した。そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者になっている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。主はわたしたちにこう命じておられるからです。

『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、
あなたが、地の果てにまでも
救いをもたらすために。』

異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。ところが、ユダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追い出した。それで、二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニオンに行った。他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

解説：

パウロの一行はパフォス（キプロス）からペルゲ、そしてピシディア州のアンティオキアへ行きました。アンティオキアはローマの植民都市であり、フリギア・ガラテヤ地域の第一の都市でした。そこでパウロは説教を行なっていきます。この説教はパウロの説教の中で一番初めに記録されたものでした。パウロの説教の中心は神様が遣わしたイエスについてでした。イエスは、ダビデに約束された方として、バプテスマのヨハネの証言する方として、また死から甦られた方として話されています。またその復活はすでに聖書で預言させたことを通して、全てがイエスを証言しているものでした。この説教に多くの人々が心打たれ、また安息日に説教をしてもらうことをお願いします。しかしユダヤ人はパウロとバルナバをねたま、迫害を行います。

質問：

①パウロ説教は多くの人々の心を打つものでした。御言葉そしてイエスの十字架は多くの人

の心を変える力があります。あなたが最も心打たれた説教はなんですか？またなぜですか？
②迫害されたパウロとバルナバでしたが、勇敢に御言葉を語り続けました。同時にそれは異邦人にも福音が伝わっていくという内容でした。これにより、よりユダヤ人からの迫害を受けることとなります。迫害を受けながらも語り続けるパウロとバルナバはどのような思いだったのでしょうか？どのようにしたら、パウロやバルナバのように私たちは勇敢に語る事ができるのでしょうか？

<4日目>

使徒14：14－17

使徒たち、すなわちバルナバとパウロはこのことを聞くと、服を裂いて群衆の中へ飛び込んで行き、叫んで言った。「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間に過ぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、わたしたちは福音を告げ知らせしているのです。この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です。神は過ぎ去った時代には、すべての国の人が思い思いの道を行くままにしておかれました。しかし、神は御自分のことを証ししないでおられたわけではありません。恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たしてくださっているのです。」

解説：

パウロはリストラでの宣教中に、生まれつき足が悪く、一度も歩いたことのなかった男性に会います。パウロはこの男性に信仰があるのを認めます。そして「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と言うことで、この男性の足を癒します。リストラの人々はパウロの奇跡を見て、パウロとバルナバが神々であるに違いないと信じ込み、二人を礼拝します。パウロとバルナバは衣を裂きます。衣を裂くことによって、人を神と見なす偶像礼拝に対する嫌悪感を表現しました。パウロはこの機会に、人々に神様の本当の性質を伝えます。自分たちが彼らと同じ性質を持つ‘人間’に過ぎないこと、‘生ける神’はこの世界の創造主であること、恵み、実り、食物で人の心を喜びで満たしてくれること、そして、この‘生ける神’に立ち返るように促しています。パウロとバルナバは自分たちが遣わされているのは、キリストを宣べ伝えるためであるといつも覚えていました。

質問：

- ①パウロとバルナバは人を神と見なす偶像礼拝に対して、群衆の中に飛び込んでいくほど急いで止めようとしていました。あなたの中で‘生ける神’の代わりになっているものはないか考えてみてください。もしあれば、‘生ける神’に立ち返りましょう。
- ②今のこの時代に‘生ける神’の性質を伝えるとしたら、あなたはどのような神の性質を話しますか？

< 5 日目 >

使徒 14 : 21 - 28

二人はこの町で福音を告げ知らせ、多くの人を弟子にしてから、リストラ、イコニオン、アンティオキアと引き返しながら、弟子たちを力づけ、「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」と言って、信仰に踏みとどまるように励ました。また、弟子たちのため教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信ずる主に任せた。それから、二人はピンディア州を通り、パンフィリア州に至り、ペルゲで御言葉を語った後、アリタリアに下り、そこからアンティオキアへ向かって船出した。そこは、二人が今成し遂げた働きのために神の恵みに委ねられて送り出された所である。到着するとすぐ教会の人々を集めて、神が自分たちと共にいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。そして、しばらくの間、弟子たちと共に過ごした。

解説：

パウロはアンティオキアへ戻る途中、宣べ伝えた弟子たちを強め励ますために各教会を訪問しました。‘わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない’とパウロは言います。苦難の場は同時に神様の力の場です。苦難こそは神様の勝利をもたらす過程だということを伝え、励ましました。そしてアンティオキアに到着したパウロは、弟子たちに対し、困難な状況下でいかに神様が働かれ、異邦人に信仰の門を開いてくださったかを話しました。パウロの話のフォーカスは‘神が行われた’ということでした。

質問：

- ①あなたの人生において、困難な状況の中で神様が勝利されたことを思い出しましょう。そして兄弟姉妹と神様の勝利を分かち合いましょう。
- ②パウロはどのような状況下でも福音を告げ知らせ続けました。神様は私たちと共にいて働かれます。このような状況下でこそ神様に信仰の門を開いてもらいたい人は誰でしょうか？具体的に書き出し、祈りましょう。

< 6 日目 >

使徒 15 : 6 - 11

そこで、使徒たちと長老たちは、この問題について協議するために集まった。議論を重ねた後、ペトロが立って彼らに言った。「兄弟たち、ご存じのとおり、ずっと以前に、神はあなたがたの間でわたしをお選びになりました。それは、異邦人が、わたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようになるためです。人の心をお見通しになる神は、わたしたちに与えてくださったように異邦人にも聖霊を与えて、彼らをも受け入れられたことを証明なさったのです。また、彼らの心を信仰によって清め、わたしたちと彼らとの間に何の差別をもな

さいませんでした。それなのに、なぜ今あなたがたは、先祖もわたしたちも負いきれなかった軛を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みようとするのですか。わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」

解説：

第一宣教旅行で多くの人々に福音を宣べ伝えたパウロとバルナバは出発地点だったアンテイオキアに帰ってきました。異邦人にも宣べ伝えていたパウロたちでしたが、異邦人に宣べ伝えることで律法を重んじる弟子と議論になりました。それは「モーセの律法では割礼を受けなければ救われない」、キリストの弟子になる前にユダヤ人にならなければならないという考えと思いがありました。ユダヤの人々にとって割礼を受けていること、ユダヤ人であるということは「神様から選ばれた民である」という重要なことでした。「弟子になるなら、割礼を受ける必要がある」という意見と、「割礼を受ける必要はない」という意見の議論でした。

質問：

- ①この会議において6節からのペテロの発言は自分の体験(コルネリウスの回心使徒言行録10-11章)から、そして聖霊による確信から話しています。ペテロはどのような思いだったのでしょうか？あなたが人に人生における確信を話す時、どのような話をするのでしょうか？
- ②ペテロの意見は、救いは「割礼という行い」ではなく、「主イエスによる恵み」によってであることを話しています。このことは今日あなたにとってどのような意味がありますか？どのようにすればよりイエスの恵みを感じることができるのでしょうか？

<7日目>

使徒15：12-21

すると全会衆は静かになり、バルナバとパウロが、自分たちを通して神が異邦人の間で行われた、あらゆるしるしと不思議な業について話すのを聞いていた。二人が話を終わると、ヤコブが答えた。「兄弟たち、聞いてください。神が初めに心を配られ、異邦人の中から御自分の名を信じる民を選び出そうとなさった次第については、シメオンが話してくれました。預言者たちの言ったことも、これと一致しています。次のように書いてあるとおりです。

『その後、わたしは戻って来て、
倒れたダビデの幕屋を建て直す。
その破壊された所を建て直して、
元どおりにする。
それは、人々のうちの残った者や、
わたしの名で呼ばれる異邦人が皆、

主を求めるようになるためだ。」
昔から知らされていたことを行う主は、
こう言われる。』

それで、わたしはこう判断します。神に立ち帰る異邦人を悩ませてはなりません。ただ、偶像に供えて汚れた肉と、みだらな行いと、絞め殺した動物の肉と、血とを避けるようにと、手紙を書くべきです。モーセの律法は、昔からどの町にも告げ知らせる人がいて、安息日ごとに会堂で読まれているからです。」

解説：

この会議は最終的にヤコブが話すことで決議に向かいます。ヤコブは当時エルサレムの指導者の立場でした。またこのヤコブはイエスの兄弟であり、ヤコブの手紙の著者であり、モーセの律法に忠実であったユダヤ人弟子でした。「割礼を受けるべきだ」という意見の多くの弟子たちはヤコブも同意見であり、擁護してもらうことを期待していたかもしれません。しかし、この影響力のあるヤコブが出した判断は「異邦人がなんの強制も、妨害もなく信仰に入ること」でした。ヤコブは<アモス9：1 1－1 2>から異邦人にも救いをもたらされることを確信し、この会議に決議を下しました。

質問：

- ①議論が難しくなった時に、最終的な決定は御言葉がどのように成就されるかの判断でした。あなたが今日、成就して欲しい御言葉はなんですか？御言葉が成就するために大胆に祈りましょう。そして大胆に変わっていく決心をしましょう。
- ②この会議での決議は、「偶像、みだらな行い、動物の肉と血を避けること」をしていなければ、異邦人でも割礼を受ける必要がないというものでした。これらは神様との関係を壊すものでした。今あなたのことを神様から最も遠ざけていることはなんでしょうか？それらを取り除くためにできることはなんですか？

～ 6 週目～

今週はパウロの第二回宣教旅行から学びます。この宣教旅行をきっかけにギリシア地方まで教会が広まりました。また新約聖書中のパウロの手紙の宛先である、フィリピ、テサロニケ、コリントの教会もこの時に誕生しました。第二回宣教旅行はパウロのダイナミックなミニストリーを学べるだけでなく、そこある苦難、パウロの労苦、特異な状況、それぞれの教会との関係性、共に働く仲間との関係性、そして霊の導き、神の働きと栄光など、様々な側面を学び、深めることができます。



Copyright by C.S.HAMMOND & CO.,N.Y

<1日目>

使徒言行録 15 : 36 - 41 (出発)

数日の後、パウロはバルナバに言った。「さあ、前に主の言葉を宣べ伝えたすべての町へもう一度行って兄弟たちを訪問し、どのようにしているかを見て来ようではないか。」バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネも連れて行きたいと思った。しかしパウロは、前にパンフィリア州で自分たちから離れ、宣教と一緒に行かなかったような者は、連れて行くべきでない

と考えた。そこで、意見が激しく衝突し、彼らはついに別行動をとるようになって、バルナバはマルコを連れてキプロス島へ向かって船出したが、一方、パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて、出発した。そして、シリア州やキリキア州を回って教会を力づけた。

解説：

パウロとバルナバは、二回目の宣教旅行に出かけようとしています。パウロの当初の計画は、一回目の宣教旅行で訪れた町へ再訪することでした。しかし、ここからヨーロッパ伝道の扉が開かれることになりました。ところが、二人はマルコを連れて行くのか行かないのかで激しく対立します。パウロはマルコを連れていくことを望みませんでした。マルコは前の宣教旅行の時パンフィリア州で一行から離れ、帰ってしまったからです（使徒13：13）。そこで、バルナバはマルコを連れてキプロス島へ、パウロはシラスと共に北へ向かいます。一回目の宣教旅行で、二人はイエスの福音を宣べ伝えていき、石を投げられたり迫害されたりしながらも共に歩んだ戦友でした。しかし、マルコを原因として二人は別行動を取るようになります。ルカは「激しい衝突」という表現を使いましたが、これは中立の言葉であり、どちらかを評価したり、裁いたりするものではありませんでした。結果的に二つの宣教旅行が送り出されることになりました。

質問：

- ①パウロの当初の計画はマケドニア州やアカイア州に教会を建てることではありませんでした。それは後になって神様からパウロに示されていきました。私たちが神様の計画を知っていくには何が必要だと思いますか？
- ②バルナバとマルコはいとこ同士でした。前の宣教旅行で家へ引き返してしまったマルコに対して、バルナバは信じ共に宣教へ出かけます。バルナバはどのようにしてマルコを連れて行ったと思いますか？またバルナバのどのような霊的キャラクターを見ることができのでしょうか？
- ③マルコはパウロと決別した宣教旅行の後、パウロを支える存在となりました。後にマルコはパウロと共に獄中に（コロサイ4：10）、また別の場面では獄中で非常に苦しい状況の中で、パウロはマルコを連れて来てほしいとテモテに願っています（2テモ4：11）。パウロとマルコは共に神様を見て互いに励まし合う存在となりました。二人がその関係性になるために、それぞれどのような霊的成長があったと思いますか？あなたは今そのような関係がありますか？誰とそのような関係を築きたいでしょうか？
- ④パウロとバルナバの衝突と決別に神様はどのような計画をお持ちだったと思いますか？

< 2日目 >

使徒16：1－5（ガラテヤ州）

パウロはデルベにもリストラにも行った。そこに、信者のユダヤ婦人の子で、ギリシア人を父に持つ、テモテという弟子がいた。彼は、リストラとイコニオンの兄弟の間で評判の良い人であった。パウロは、このテモテと一緒に連れて行きたかったので、その地方に住むユダヤ人の手前、彼に割礼を授けた。父親がギリシア人であることを、皆が知っていたからである。彼らは方々の町を巡回して、エルサレムの使徒と長老たちが決めた規定を守るようにと、人々に伝えた。こうして、教会は信仰を強められ、日ごとに人数が増えていった。

解説：

パウロはバルナバ、マルコと別れた後にシラスと共に第一回宣教旅行の場所を再訪しました。そしてリストラの町で、テモテという若い弟子と出会います。このテモテこそ後に生涯を通じての協力者となる人です。この時テモテは20歳ほどだったと言われています。テモテはギリシア人を父とし、ユダヤ人を母として生まれました。テモテはユダヤ人にとっての神の契約である割礼を受けてはいませんでした。パウロはここでテモテに割礼を授けます。ユダヤ文化では子供は母親の宗教を受け継ぐ文化がありましたが、ギリシア文化では父親に従う文化がありました。割礼を授けた理由は「ユダヤ人の手前」と書かれているように、パウロにとってテモテがユダヤ人であることは当然のことだったかもしれません。同時に、パウロと同様に、ユダヤ人にも異邦人にもキリストのことを宣べ伝えていく弟子として、神様に導かれたのかもしれません。また興味深いことは、エルサレム会議で決まった規定は異邦人の回心に割礼は必要ではないというものでした（使徒15章）。パウロはそれを伝える役割を持ってこの宣教旅行をしているにも関わらず、この一番始めの場面でテモテに割礼を授けています。エルサレム会議の規定が教会に伝えられると、教会の信仰は強められ、日ごとに人数も増えていきました。

質問：

- ①パウロはテモテにどのような資質を見出したと思いますか？また信仰者である祖母ロイスと母エウニケから（2テモ1：5）、テモテはどのような資質を受け継いだと思いますか？
- ②エルサレム会議の規定がありながらも、パウロがテモテに割礼を授けた背景には様々な文化や考え方、状況などがあつたと考えられます。解説に書かれていることの他にもどのようなものがあつたと思いますか？ぜひ資料などを調べてみてください。
- ③エルサレム会議の規定が伝えられることで、教会の信仰は強められました。なぜそのことが教会を強めることになったと思いますか？私たちの教会の信仰が強められ、人数が増えていくために、今必要なことは何だと思いますか？あなたが取り組めることは何でしょうか？

< 3日目 >

使徒16：1－40（フィリピ）

使徒16：25－34

真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げてしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。まだ真夜中であつたが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。

解説：

幻を通してマケドニアへのビジョンが示され（使徒16：9－10）、パウロたちはマケドニア州にやって来ました。その中で最初に選んだ都市はフィリピでした。フィリピはその地域の大きな都市で、ローマの植民都市でした。植民都市とは、ローマ人が移入して作られた町で、全員がローマの市民権を与えられる当時のローマ社会で最もランクの高い都市のひとつでした。植民都市は行政も独立し、独自に力を持っていました。高官たちの態度や後にパウロがローマの市民権について取り上げるのも植民都市であったからだと考えられます。当時ユダヤ人は10人以上のユダヤ人男性がいる場合、その町に会堂を建てましたが、10人未満の場合は「祈りの場所」を作り、集まっていました。パウロはそこで神をあがめる（God-Fearer / Worshiper of God）リディアに出会います。「神をあがめる」者とは、当時異邦人でありながらユダヤの神をあがめる人たちで、パウロのミニストリーでは多くの「神をあがめる」者たちが回心しました（使徒13：15、17：4、18：7）。リディアとその家族は心が開かれ、全員がバプテスマを受けました。彼女はフィリピの教会で重要な役割を果たし、彼女の家はその中心になったと考えられています（40節）。その後には、迫害で捕まり、そこから看守とその家族が救われる神様の奇跡が描かれています。最終的にパウロたちは町から追い出されるような形になりますが、このローマ色の強い植民都市において力強い神様の、そしてパウロにとって最も愛すべき教会が建てられたのです。

質問：

- ①なぜパウロはマケドニア州へのビジョンが示された後、ネアポリスやアンフィポリスという都市ではなく、フィリピを選んだのでしょうか？神様はフィリピに対してどのような計画をお持ちだったと思いますか？神様のビジョンは私たちにはどのように働くのでしょうか？
- ②パウロのミニストリーではリディアをはじめ異邦人の「神をあがめる」者たちが多く回心し、重要な役割を果たしたと考えられます。そこにはどのようなメッセージがあると思いますか？
- ③フィリピではリディアとその家族、看守とその家族と、家族／コミュニティ単位での回心

が記されています。このことから私たちが学べることがあるでしょうか？また私たちの回心にも適用できることがあるでしょうか？

④ひどい迫害、鞭打ちによる身体の痛みの中でも、神様はパウロとシラスに喜びと奇跡を与えました、今日あなたにとって神様はどのような方ですか？三つ挙げてみてください。

⑤「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。(31節)」今日あなたはこの言葉をどのように受け止めますか？あなたの家族、友達の救いのために祈りましょう。

< 4 日目 >

使徒 17 : 1 - 9 (テサロニケ)

使徒 17 : 2 - 5

パウロはいつものように、ユダヤ人の集まっているところへ入って行き、三回の安息日にわたって聖書を引用して論じ合い、「メシアは必ず苦しみを受け、死者の中から復活することになっていた」と、また、「このメシアはわたしが伝えているイエスである」と説明し、論証した。それで、彼らのうちのある者は信じて、パウロとシラスに従った。神をあがめる多くのギリシア人や、かなりの数のおもだった婦人たちも同じように二人に従った。しかし、ユダヤ人たちはそれをねたみ、広場にたむろしているならず者を何人か抱き込んで暴動を起こし、町を混乱させ、ヤソンの家を襲い、二人を民衆の前に引き出そうとして捜した。

解説：

フィリピの町を後にして、パウロとシラスはテサロニケに来ました。テサロニケは当時のマケドニア州の首都であり、人口が多く、繁栄した都市でした。聖霊が導いたマケドニア州伝道の重要な地点だったと考えられます(使徒 16 : 9 - 10)。そして、実際にテサロニケの教会から御言葉が広がりました(1テサ 1 : 8)。パウロは会堂で御言葉を語りました。パウロの説教の2つの特徴として、論じ(2節:英語 reason)、説得する(4節:英語 persuade; 信じ [新共同訳])がありました。これはアテネ、コリントでも用いられている表現です(使徒 17 : 17、18 : 4)。パウロは丁寧に説明し、同時に人々が納得するように御言葉を伝えました。そこで多くの人が回心をしました。しかし、ユダヤ人たちのねたみを買ひ、短い期間で追い出されることとなりました。ヤソンと他の兄弟たちから「保証金」を取った(9節)とありますが、これは二度と暴動を起こさせないための脅しとして用いられ、これによってパウロとシラスは町を出て行く必要があり、さらにテサロニケに戻れなくなったと考えられます(1テサ 2 : 17 - 18)。そのことはパウロの大きな不安と心配になりました(1テサ 3 : 1 - 5)。

質問：

①聖霊によって示されたマケドニア州の伝道の中で、その首都テサロニケに対してパウロは

どのようなビジョンを持ったと思いますか？私たちは自分のミッションフィールドにどのようなビジョンがあるでしょうか？

②パウロは御言葉を丁寧に論じ (reason)、説得に努めました (persuade)。私たちはどのようにして御言葉を伝えているでしょうか？自分の伝え方で改善すべきこと、成長すべき点はあるでしょうか？

③多くの人が回心する中でパウロは不本意にテサロニケを離れなければならなくなり、再び戻ることもできませんでした。パウロはどのような思いがあったと思いますか？上手くいっていると感じていても、状況は悪くなっていくときに、私たちはどのように反応するでしょうか？

< 5日目 >

使徒 17 : 10 - 15 (ベレア)

兄弟たちは、直ちに夜のうちにパウロとシラスをベレアへ送り出した。二人はそこへ到着すると、ユダヤ人の会堂に入った。ここのユダヤ人たちは、テサロニケのユダヤ人よりも素直で、非常に熱心に御言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日、聖書を調べていた。そこで、そのうちの多くの人々が信じ、ギリシア人の上流婦人や男たちも少なからず信仰に入った。ところが、テサロニケのユダヤ人たちは、ベレアでもパウロによって神の言葉が宣べ伝えられていることを知ると、そこへも押しかけて来て、群衆を扇動し騒がせた。それで、兄弟たちは直ちにパウロを送り出して、海岸の地方へ行かせたが、シラスとテモテはベレアに残った。パウロに付き添った人々は、彼をアテネまで連れて行った。そしてできるだけ早く来るようにという、シラスとテモテに対するパウロの指示を受けて帰って行った。

解説：

テサロニケから送り出されたパウロとシラスはベレアに来ました。そこでも同じように会堂で御言葉を伝えました。ベレアのユダヤ人たちはテサロニケのユダヤ人よりも「素直 (英語：noble)」だったとあります。これは英語の意味の通り「高貴」であったという意味です。彼らは熱心に御言葉を受け入れ、調べていました。そのことにより、多くの人々の救い、また異邦人であるギリシア人の上流婦人、多くのギリシア男性 (英語：many Greek men) の回心もありました。これはテサロニケではなかったことでした。しかし、再びテサロニケからのユダヤ人の妨害にあり、町から追い出されることになりました。若い教会を心配してシラスとテモテはベレアに残ったのかもしれませんが。アテネで合流した後も、パウロは2人をすぐにマケドニア州に派遣したようです (1テサ 3 : 1 - 2、使徒 18 : 5)。同時に、パウロが強く仲間を必要としていた姿も見ることができます (15節)。

質問：

①ベレアのユダヤ人たちのキャラクターは「高貴」と表現されています。これはどのような

キャラクターだと思いますか？私たちはどのような点で「高貴」になれるでしょうか？またギリシアの上流婦人や多くのギリシア人男性が回心したことに、「高貴」であることはどのように影響したと思いますか？

②ここでも不本意に町を離れなければならなかったパウロはどのような思いだったでしょうか？繰り返し、同じ問題に悩まされる時、私たちはどのように反応するでしょうか？

③シラスとテモテをマケドニア州の教会に派遣したのはどのような思いと考えがあったからだと思いますか？パウロはどのような思いで教会をケアしていたでしょうか？今日私たちの教会に対する思いはどのようなものでしょうか？どのような点で新たに与えたり、仕えたりすることができるでしょうか？

< 6 日目 >

使徒 17 : 16 - 34 (アテネ)

使徒 17 : 28 - 31

皆さんのうちのある詩人たちも、／『我らは神の中に生き、動き、存在する』／『我らもその子孫である』と、／言っているとおりです。わたしたちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです。

解説：

ベレアからも追い出される形となったパウロはアカイア州のアテネにやって来ました。マケドニア州の伝道を考えていたパウロにとってアテネに来ることは計画になかったことかもしれません。そして、迫害での追い出し、マケドニア州の教会への心配(1テサ3:1-5、使徒17:14)、アテネでの孤独などで、パウロは難しい状況にあったと考えられます。ギリシア帝国の時代は終わりローマ帝国に支配されていましたが、アテネはそれでもなお当時の文化と教養の中心地でした。パウロは会堂だけでなく、広場(アゴラ)でも福音を伝えました。アゴラとは商業、集会、裁判、哲学の論議などが行われる、アテネの重要な都市機能を果たした場所でした。また当時の議会の機能であったアレオパゴスでもパウロは福音を宣べ伝え、その説教が使徒言行録に残されました。そこでのパウロの説教は、旧約聖書からの説き明かす通常のパウロのスタイルとは異なり、アテネの文化に沿って展開し、最後に悔い改めと復活のメッセージが結び付けられました。パウロが用いた2つの引用は古典ギリシアの作家からのものでした。しかし、パウロの懸命な宣べ伝えにも関わらず、アテネでの宣教は上手くいかなかったとされています。アテネに正式に教会があったという記録は残っていません。またパウロ自身がアテネの次にコリントに行ったときに、「衰弱していて、恐れ

に取りつかれ、ひどく不安」(1コリ2:3)だったと証言していて、厳しい状況に直面したと考えられます。

質問：

①パウロがアテネに来た時、どのような思いだったと思いますか？自分の計画になかった状況、同時に自分の離れたところにある心配・不安、仲間がいない状況の時、私たちはどのように反応するでしょうか？同時に、パウロを奮い立たせたものは何だったと思いますか？

②アテネでのパウロの説教スタイルから学べることはあるでしょうか？「すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです(1コリ9:22)」というパウロの言葉をどのように考えさせられるでしょうか？

③次のコリントに到着したとき「衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安」だったとは、アテネでの何がそのような思いにさせたと思いますか？そのような状態の中で、パウロはどのようなことを考えていたと思いますか？自分のやっていることが上手くいかず、心も体も衰弱を感じる時、私たちはどうするでしょうか？どのように心をプロセスして、神様を見ていくことができるでしょうか？

<7日目>

使徒18:1-17(コリント)

その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。ここで、ポントス州出身のアキラというユダヤ人とその妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めていた。シラスとテモテがマケドニア州からやって来ると、パウロは御言葉を語ることに専念し、ユダヤ人に対してメシアはイエスであると力強く証しした。しかし、彼らが反抗し、口汚くのしだったので、パウロは服の塵を振り払って言った。「あなたたちの血は、あなたたちの頭に降りかかれ。わたしには責任がない。今後、わたしは異邦人の方へ行く。」パウロはそこを去り、神をあがめるティティオ・ユストという人の家に移った。彼の家は会堂の隣にあった。会堂長のクリスポは、一家をあげて主を信じるようになった。また、コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、洗礼を受けた。ある夜のこと、主は幻の中でパウロにこう言われた。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」パウロは一年六か月の間ここにとどまって、人々に神の言葉を教えた。

解説：

失意の中で(1コリ2:3)、パウロはアテネからコリントに来ました。コリントは海に挟

まれた地形により貿易が盛んで栄えていたアカイア州の首都でした。またギリシア文化が強く、アフロディーテ（愛と美と性を司るギリシア神話の女神）崇拝の中心地であり、その神殿には多くの神殿娼婦が存在し、コリントのモラルの低さは有名でした。その場所で、パウロは宣教を開始し、そこでパウロにとって重要な福音の協力者となるアキラとプリスキラ（ローマ16：2-3）と出会い、マケドニア州から戻ったシラスとテモテとの働きも戻りました。再びユダヤ人からの反対がありましたが、多くの人の回心がありました。主の幻からのメッセージもあり、パウロは一年六ヶ月滞在し、神の言葉が広がりました。本来アカイア州に来る予定がなかったかもしれない中で（前日の解説参照）、神様のビジョンによりパウロは長くコリントに滞在し、新約聖書に二つも手紙が残るほど重要かつパウロにとって思い入れのある教会が建てられました。ある時ユダヤ人たちがパウロを襲撃し、地方総督であるガリオンに訴え出ました。しかし、ガリオンはそのことを問題にはしませんでした。これによりパウロは宣教を続けることができ、神様からのビジョンである「わたしがあなたと共にいる。あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ」（10節）が実現したと考えられます。

質問：

- ①失意の中でコリントにやって来たパウロにとって、何が励ましと力になったと思いますか？自分にとっていつも神様に立ち返るために励ましと力になるものは何でしょうか？ぜひノートに書き出してみましよう。
- ②私たちにもパウロにとってのプリスキラとアキラ、シラスとテモテのような関係があるでしょうか？どのようにしてそのような関係を作っていけるでしょうか？また誰とそのような関係を築いていきたいでしょうか？
- ③なぜアテネではなく、コリントを神様は選んだのでしょうか？私たちはどのように私たちのミッションフィールドを捉えているでしょうか？神様はどのようにコリントを見ておられたでしょうか？
- ④神様からのビジョンが示されて、パウロはどのように感じたと思いますか？御言葉を宣べ伝えて、ユダヤ人からの反対がある、それはこれまでも繰り返されたパターンでした。そこで神様からのビジョンがあったとき、パウロはどのようにプロセスして、神様に反応したと思いますか？今自分に示されているビジョンや導いてくださっていることは何だと思いますか？その実現に向けて何をすることができますか？ぜひ具体的に実行しましょう。

～ 7 週目～

今週はパウロの第三回宣教旅行を学びます。第一回と第二回の宣教旅行とは大きく異なり、第三回は新しい教会を建てるのではなく、今まで建ててきた教会を強める目的がありました。その中でもパウロはエフェソで約三年間滞在しましたが、これは全ての宣教旅行で最も長い期間でした。第三回宣教旅行では、パウロを通して働く神様の奇跡、パウロの教会と兄弟姉妹への特別な思い、そしてどのような困難にもぶれないパウロの強い確信と御国の将来へのヴィジョンを学ぶことができます。



Copyright by C.S. HAMMOND & CO.,N.Y.

< 1 日目 >

使徒 19 : 1 - 7 エフェソで

アポロがコリントにいたときのことである。パウロは、内陸の地方を通してエフェソに下って来て、何人かの弟子に出会い、彼らに、「信仰に入ったとき、聖霊を受けましたか」と言うと、彼らは、「いいえ、聖霊があるかどうか、聞いたこともありません。」と言った。パウ

ロが、「それなら、どんな洗礼（バプテスマ）を受けたのですか。」と言うと、「ヨハネの洗礼（バプテスマ）です」と言った。そこで、パウロは言った。「ヨハネは、自分の後から来る方、つまりイエスを信じるようにと、民に告げて、悔い改めの洗礼（バプテスマ）を授けたのです。」人々はそれを聞いて主イエスの名によって洗礼（バプテスマ）を受けた。パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が降り、その人たちは異言を話したり、預言をしたりした。この人たちは、皆で十二人ほどであった。

解説：

パウロはエフェソに到着すると、「何人かの弟子」と言われる人々に遭遇します。パウロは、彼らと会話をする中で、彼らが聖霊の賜物を受けていないことがわかりました。彼らは罪が何かを知っており、道徳的に向上する意欲もありました。しかし、キリストの恵みと聖霊の助けを知りませんでした。パウロは、この人々にヨハネ自身は悔い改めの必要を説き、「より力のある方」の到来と、この方がイエス・キリストであること、そして、この方を信じるように教えたことを伝えました。人々は、これを聞いて主イエスの名によって、洗礼（バプテスマ）を受けました（5節）。彼らは、聖霊の賜物の力と恵みを実感しました（6節）。

質問：

- ①私たちは、洗礼（バプテスマ）によって、イエス・キリストの犠牲によって私たちの犯した罪が拭い去られ、イエス・キリストの恵みによって賜物として聖霊を受けました（使徒2：38）。このような難しい状況の中でも、あなたは、イエス・キリストから与えていただいたこの恵みに目を向けることができますか？向けられない時、妨げになるのは、何ですか？この1週間を、イエス・キリストから恵みを覚えて始めましょう。
- ②エフェソの「十二人」は、パウロがバプテスマについて伝えた時に、すぐに反応して、イエスの名によってバプテスマを受けました。謙虚な態度でした。このように、あなたは、伝えてもらった教えやアドバイスを実行しますか？それとも、そのままにして何もしませんか？何もしないとしたら、実行することを妨げているのは何ですか？書き出してみ、兄弟姉妹に助けてもらいましょう。

< 2日目 >

使徒19：13－20 エフェソでの奇跡

ところが、各地を巡り歩くユダヤ人の祈祷師たちの中にも、悪霊どもに取りつかれている人々に向かい、試みに、主イエスの名を唱えて、「パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる」と言う者があった。ユダヤ人の祭司長スケワという者の七人の息子たちがこんなことをしていた。悪霊は彼らに言い返した。「イエスのことは知っている。パウロのこともよく知っている。だが、いったいお前たちは何者だ。」そして、悪霊に取りつかれている男が、この祈祷師たちに飛びかかって押さえつけ、ひどい目に遭わせたので、彼らは

裸にされ、傷つけられて、その家から逃げ出した。このことがエフェソに住むユダヤ人やギリシア人すべてに知れ渡ったので、人々は皆恐れを抱き、主イエスの名は大いにあがめられるようになった。信仰に入った大勢の人が来て、自分たちの悪行をはっきり告白した。また、魔術を行っていた多くの者も、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。その値段を見積もってみると、銀貨五万枚にもなった。このようにして、主の言葉はますます勢いよく広まり、力を増していった。

解説：

当時、あらゆる病は悪霊が住み着いているために起こると信じられていたため、悪霊払いが公認された職業でした。悪霊を払う者が、強い霊の名を唱えるほどに強い悪霊を追い出すことができたそうです。スケワの七人の息子たちが、軽い気持ちでイエスの名を用いたため、迷信を揺るがす出来事が起こりました。そのため、人々はイエスの名を用いることへの畏れと神様の力強さを知り、多くの人がメタノイアし、信仰を持つようになりました。20節では、「このようにして」と書いてありますが、誰もこのような方法で御言葉が広まり、力を増していくことを想像していたのでしょうか。「主イエスの名は大いにあがめられる」ために神様は私たちの発想を超えて大きく働いてくださいます。

質問：

- ①悪霊はイエスとパウロを知っていましたが、スケワの息子たちを知りませんでした。彼らの違いは何だったのでしょうか？私たちは健全な畏れと全知全能の神様への確信を持ち、イエスの名を唱え、また祈っているのでしょうか？
- ②今までの人生を振り返り、神様はどのような形で働いてくださったことがありますか？それは、あなたを通して、かもしれませんか、あなたを通さないで、かもしれませんか。思い出し、書き出して見てください。同じ神様が今も働いています。今のあなたの人生で、どのように神様は想像を超えて働くことができるのでしょうか？そのために祈りましょう。そのサインを見逃さないように心の目を開きましょう。

< 3日目 >

使徒19：21－40 エフェソでの騒動

使徒19：28－40

これを聞いた人々はひどく腹を立て、「エフェソ人のアルテミスは偉い方」と叫びだした。そして、町中が混乱してしまった。彼らは、パウロの同行者であるマケドニア人ガイオとアリスタルコを捕らえ、一団となって野外劇場になだれ込んだ。パウロは群衆の中へ入っていかうとしたが、弟子たちはそうさせなかった。他方、パウロの友人でアジア州の祭儀をつかさどる高官たちも、パウロに使いをやって、劇場に入らないようにと頼んだ。さて、群衆はあれやこれやとわめき立てた。集会は混乱するだけで、大多数の者は何のために集まったの

かさえ分からなかった。そのとき、ユダヤ人が前へ押し出したアレクサンドロという男に、群衆の中のある者たちが話すように促したので、彼は手で制し、群衆に向かって弁明しようとした。しかし、彼がユダヤ人であると知った群衆は一斉に、「エフェソ人のアルテミスは偉い方」と二時間ほども叫び続けた。そこで、町の書記官が群衆をなだめて言った。「エフェソの諸君、エフェソの町が、偉大なアルテミスの神殿と天から降って来た御神体との守り役であることを、知らない者はないのだ。これを否定することはできないのだから、静かにしなさい。決して無謀なことをしてはならない。諸君がここへ連れて来た者たちは、神殿を荒らしたのでも、我々の女神を冒瀆したのでもない。デメトリオと仲間の職人が、だれかを訴え出たいのなら、決められた日に法廷は開かれるし、地方総督もいることだから、相手を訴え出なさい。それ以外のことで更に要求があるなら、正式な会議で解決してもらわなければならない。本日のこの事態に関して、我々は暴動の罪に問われるおそれがある。この無秩序な集会のことで、何一つ弁解する理由はないからだ。」こう言って、書記官は集会を解散させた。

解説：

この暴動によりパウロたちの命は脅かされ、実質的にアジア州での福音宣教は終わることになりました。この事件はルカが言及しているより実際は危険なものだったと思われます。1コリント15：32「エフェソで野獣と闘った（“fought wild beasts in Ephesus”）」
2コリント1：8「生きる希望を失った（“despaired of life itself”）」
2コリント1：10「これほど大きな死の危険（“such a deadly peril”）」
ローマ16：4「命がけてわたしの命を守ってくれた（“risked their lives for me”）」 これらの聖句はパウロ自身がこの暴動により命を失うほど危険だったことを示していると言われています。パウロは命をかけて群衆の中に入っていきこうとしたのは、このような状況でした。

質問：

- ①パウロはなぜ命が危険に晒される状況にも立ち向かうことができたのでしょうか？この姿にはイエスが十字架に向かって行くような態度を見ることができます。今までどのような状況に立ち向かって行ったことがありますか？なぜできたのでしょうか？今はどうでしょうか？
- ②パウロは捕らえられたガイオとアリストアルコを解放するために群衆の中へ入って行こうとしたようです。どのようなパウロの仲間への想いを感じますか？仲間はどのようなパウロの態度を見て、何を感じたのでしょうか？そのような想いを持って接したい仲間がいますか？

< 4日目 >

使徒20：1－6 エフェソからの出発と同行者

この騒動が収まった後、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げてからマケドニア州へと出発した。そして、この地方を巡り歩き、言葉を尽くして人々を励ましながら、ギ

リシアに来て、そこで三か月を過ごした。パウロは、シリア州に向かって船出しようとしていたとき、彼に対するユダヤ人の陰謀があったので、マケドニア州を通して帰ることにした。同行した者は、ピロの子でベレア出身のソパトロ、テサロニケのアリスタルコとセクンド、デルベのガイオ、テモテ、それにアジア州出身のティキコとトロフィモであった。この人たちは、先に出発してトロアスでわたしたちを待っていたが、わたしたちは、除酵祭の後フィリピから船出し、五日でトロアスに来て彼らと落ち合い、七日間そこに滞在した。

解説：

パウロのマケドニア州とアカイア州の訪問は最も要約されており、詳細が掴めない箇所でもあります。第二回宣教旅行で建てた教会を中心に訪問し、励まし、イリリコン州にも福音を伝えたとされています（ローマ15：19）。興味深いのは、パウロにかつてないほどの同行者がいた、ということです。彼らはエルサレムへの寄付金を携えるように依頼された各教会の代表者とも言われていますが、エフェソで既に名前が出てくることからパウロが育てようと意図的に集めていた次世代のリーダーという説が濃厚です。実際にパウロの手紙に彼らの名前は多く出てきます。いずれにせよ、そこからパウロの全ての教会の一致に努める思い、そして教会の将来を誰よりも思う熱意が伝わってきます。パウロはエルサレムに向かうと決心した時点で、自分の命が長くないとわかっていました。パウロは彼らに自分の夢とヴィジョンを託し、自分の死後、彼らを中心に教会が成長する姿に思いを馳せていたのかもしれない。

質問：

- ①パウロは多くの実績がありながらも、謙虚に兄弟たちと共に仕えていました。パウロと彼らのように、あなたにとって神様のために共に仕えている兄弟姉妹は誰ですか？これから誰とより共に仕えていきたいですか？
- ②あなたは自分の信仰と確信とヴィジョンを誰に託していきたいですか？
- ③自分が世を去る時、自分の教会がどのようなになっているヴィジョンがありますか？そのために今私たちには何ができるのでしょうか？

< 5日目 >

使徒20：7－12 模範的な弟子の集まり

週の初めの日、わたしたちがパンを裂くために集まっていると、パウロは翌日出発する予定で人々に話をしたが、その話は夜中まで続いた。わたしたちが集まっていた階上の部屋には、たくさんのともし火がついていた。エウティコという青年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死んでいた。パウロは降りて行き、彼の上にかがみ込み、抱きかかえて言った。「騒ぐな。まだ生きている。」そして、また上に行って、パンを裂いて食べ、夜

明けまで長い間話し続けてから出発した。人々は生き返った青年を連れて帰り、大いに慰められた。

解説：

この箇所では、当時の集まりの様子が描かれています。兄弟姉妹が集まり、愛の交わりの中で互いに分け合って食べる食事は愛餐と呼ばれていました。この愛餐にこそ、教会の本質である、愛の溢れる交わり、温かい友情、家庭的な性質、家族としての精神を見いだすことができます。エウティコという青年をパウロが生き返らせる奇跡があり、また彼らの交わりは夜中まで続き、さらに夜明けまで続きました。このようなコミュニティを通して、BELIEVE（信じる）、BELONG（つながる）、BECOME（変わる）を神様が起こしてくださる初代教会の模範が示されています。

質問：

- ①あなたは教会や弟子のコミュニティのどのような部分に惹かれて、教会に来ましたか、弟子になりましたか？この箇所に描かれている家族のような温かさと愛の溢れるコミュニティに心を動かされたのではないのでしょうか。
- ②あなたの小グループは、この場面のような性質を持っているのでしょうか？3Bのどの面で成長する必要がありますか？時間が経つのを忘れ、夜明けまでずっと一緒にいたくなる、とはどのような関係でしょうか？

< 6日目 >

使徒20：17－36 エフェソの長老たちに別れを告げる

使徒20：31－38

だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」このように話してから、パウロは皆と一緒にひざまずいて祈った。人々は皆激しく泣き、パウロの首を抱いて接吻した。特に、自分の顔をもう二度と見ることはあるまいとパウロが言ったので、非常に悲しんだ。人々はパウロを船まで見送りに行った。

解説：

パウロがエフェソの長老たちに別れを告げる場面では、深い愛と哀しみに満ちていました。約三年間の滞在もあり、いちばん思い入れのある教会の一つと言えるかもしれません。パウロから奨励・警告・助言が与えられていますが、全てが口だけではなく、パウロの模範によって既に示されていました。模範はパウロのデザインプリンクの本質でした。他の手紙の中にも一貫しているパウロの模範を示す態度が示されています。

フィリピ3：17「わたしに倣う者となりなさい（“imitate me”）」

1コリント4：16－17「わたしに倣う者になりなさい（“following my example”）」

1テサロニケ1：6－7「わたしたちに倣う者、そして主に倣う者になり（“became imitators of us and of the Lord”）」

それは人間的なものではなく、誰よりもパウロがイエス・キリストの模範に従っていたからに他なりません。その心は、イエスが弟子たちに「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである」（ヨハネ13：15）と言っているのと全く同じです。そして、そのパウロの模範は、各教会に、そしてテモテのような個人にも受け継がれていきました。倣うことは、まず見る・聞くこと、から始まり、実行に移すことです。

質問：

- ①今あなたはキリストのどの部分を模範にして自分の人生に取り入れていますか？
- ②今あなたはキリスト以外の誰の、どの部分を、倣っていますか？
- ③あなたの模範的な部分はどのようなところでしょうか？書き出してみてください。家族や小グループのメンバーに聞いてみてください。

<7日目>

使徒21：7－14 エルサレムに向かう

わたしたちは、ティルスから航海を続けてプトレマイスに着き、兄弟たちに挨拶して、彼らのところで一日を過ごした。翌日そこをたってカイサリアに赴き、例の七人の一人である福音宣教者フィリポの家に行き、そこに泊まった。その人には預言をする四人の未婚の娘がいた。いく日か滞在していたとき、ユダヤからアガボという預言する者が下って来た。そして、わたしたちのところに来て、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛って言った。「聖霊がこうお告げになっている。『エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。』」わたしたちはこれを聞き、土地の人と一緒にあって、エルサレムへは上らないようにと、パウロにしきりに頼んだ。そのとき、パウロは答えた。「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」パウロが私たちの勧めを聞き入れようとしないので、わたしたちは、「主の御心が行われま

すように」と言って、口をつぐんだ。

解説：

パウロは目指しているエルサレムへの旅を続けますが、エルサレムへ上る途中、ティルス、プトレmais、カイサリアに立ち寄ります。ティルスにいる弟子たち（4節）も、カイサリアで出会うアガボという預言者（使徒11：28に登場している）も、はっきりとエルサレムでの危険をパウロに警告します。それを聞いたパウロの同行者たちは、パウロがエルサレムへ上っていくのを引き止めようとします。しかし、パウロは、自分の選んだ進路、すなわち、神様の計画を遂行する決意を変えようとしませんでした。パウロ自身は、エルサレムで死ぬことさえも受け入れる覚悟ができていました。パウロの決意を見て人々は、それ以上は引き止めることができませんでした。ただ神様の御心が行われることを信頼し、黙るほかありませんでした。

質問：

①この聖句の箇所にあるパウロの態度は、たとえ人に反対されても、神様の計画・御心ならば、それを実践するというものでした。あなたは、神様の御心だと確信したならば、それを貫こうとする態度はありますか。そのような経験があれば、思い出して書き出してみましよう。今日、あなたにどんな神様のご計画があるのかを書き出してみましよう。

②エルサレムへ向かう途中、パウロは、ティルス、プトレmais、カイサリアに立ち寄ります。それらの都市に住む弟子たちは、パウロを歓迎します。パウロは、行く先々で、自分と同じ思いを持った弟子たちに会い、励まし合っていたことがわかります。このパウロと弟子たちのように、私たちは互いに励まし合っていますか？このコロナウィルスの影響で直接会うことができない状況が長期化して来ています。その中で、あなたが、自分の小グループだけでなく、自分のいる教会の弟子たち、全国にいる弟子たち、また Sea Region の教会の弟子たち、世界の教会の弟子たちのためにできることは何か考えてみましよう。私たちはいつでも祈ることができます！

～ 7 週目～

遂に使徒 2 1 章から 2 8 章でパウロのエルサレムからローマへの旅が完結します！！歴史的な背景を理解する事でより神様の働きが実感できます。

パウロはエルサレムで不当な訴えにより捕らえられ、カイサリアに連行され総督フェリクスと総督フェストゥスによって裁判にかけられます。後にローマの皇帝カエザルに上訴したことによって、最終目的地ローマに到着します。政治的な背景も含めてわかりにくい箇所なので簡単に説明すると、3つのレベルで進展していると考えて良いでしょう。

神様の御心：

使徒 9：15－16『すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。』

神様はパウロを通して御心を全うします。パウロは第1次～3次宣教旅行を通して異邦人に述べ伝えました。またエルサレムのユダヤ人やユダヤ人指導者、ローマ帝国の指導者にも福音を伝えるミッションを果たそうとしました。不当に告訴されましたが、裁判に勝つことには興味がなく、あらゆる機会を通してキリストを伝える事に情熱を注ぎました。

ユダヤ人：

パウロはローマの市民権を持っていたため、ユダヤ教の法律において殺すことは出来ませんでした。結果、ユダヤ人はパウロを不当に告訴し暗殺する陰謀を企みましたが、ローマの騎兵によりカイサリアまで護送され、神様はこの計画を滅しました。

ローマ帝国の指導者（総督や皇帝）：

ユダヤ教の内乱に全く興味がなく、ローマの市民権を持っているパウロが暴動を起こしたり、政府に対して反逆的なことさえしなければ良いと考えていたので、パウロを死刑にすることはしませんでした。パウロは皇帝に上訴することによって、ローマに行く機会を得、裁判を通して神様のビジョンである王たちに福音を伝える夢を全うしようとしていました。

< 1 日目 >

使徒 2 2：3－16（パウロの弁明）

「わたしは、キリキヤ州のタルソスで生まれたユダヤ人です。そして、この都で育ち、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しい教育を受け、今日の皆さんと同じように、熱心に神に仕えていました。わたしはこの道を迫害し、男女を問わず縛り上げて獄に投じ、殺すことさえしたのです。このことについては、大祭司も長老会全体も、わたしのために証言してくれます。実は、この人たちからダマスコにいる同志にあてた手紙までもらい、その地にい

る者たちを縛り上げ、エルサレムへ連行して処罰するために出かけて行ったのです。」「旅を続けてダマスコに近づいたときのこと、真昼ごろ、突然、天から強い光がわたしの周りを照らしました。わたしは地面に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と言う声を聞いたのです。『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、『わたしは、あなたが迫害しているナザレのイエスである』と答えがありました。一緒にいた人々は、その光は見たのですが、わたしに話しかけた方の声は聞きませんでした。『主よ、どうしたらよいでしょうか』と申しますと、主は、『立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことは、すべてそこで知らされる』と言われました。わたしは、その光の輝きのために目が見えなくなっていましたので、一緒にいた人たちに手を引かれて、ダマスコに入りました。ダマスコにはアナニアという人がいました。律法に従って生活する信仰深い人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人の中で評判の良い人でした。この人がわたしのところに来て、そばに立ってこう言いました。『兄弟サウル、元どおり見えるようになりなさい。』するとそのとき、わたしはその人が見えるようになったのです。アナニアは言いました。今、何をためらっているのです。立ち上がりなさい。その方の名を唱え、洗礼を受けて罪を洗い清めなさい。』

解説：

パウロは21章でエルサレムに到着します。そこにはユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンの間にある、エルサレム会議で解決されなかった摩擦がありました。ユダヤ人クリスチャンもパウロについての嘘の噂を信じ、アジア州から来たユダヤ人はパウロを不当に訴え殺そうとし、パウロは神殿の境内で逮捕されます。しかしパウロは自分の身を守る事よりも、福音を伝える機会を逃さず弁明を始めます。千人隊長にはギリシャ語で話し、ユダヤ人にはヘブライ語で話し始めたので、民衆はますます静かになり聞き入ります。

質問：

- ①あなたの回心を詳しく思い出して下さい。神様と助けてくれた兄弟姉妹の為に感謝の祈りをしましょう。
- ②あなたは最近誰かに自分の回心を話しましたか？是非誰かに伝えて下さい。
- ③今ためらっている事はありますか？立ち上がり実践しましょう。

< 2日目 >

使徒23：12-24（ユダヤ人の陰謀）

夜が明けると、ユダヤ人たちは陰謀をたくらみ、パウロを殺すまでは飲み食いしないという誓いを立てた。このたくらみに加わった者は、四十人以上もいた。彼らは、祭司長たちや長老たちのところへ行って、こう言った。「わたしたちは、パウロを殺すまでは何も食べないと、固く誓いました。ですから今、パウロについてもっと詳しく調べるといふ口実を設けて、彼をあなたがたのところへ連れて来るように、最高法院と組んで千人隊長に願い出てください

い。わたしたちは、彼がここへ来る前に殺してしまう手はずを整えています。」しかし、この陰謀をパウロの姉妹の子が聞き込み、兵営の中に入って来て、パウロに知らせた。それで、パウロは百人隊長の一人を呼んで言った。「この若者を千人隊長のところへ連れて行ってください。何か知らせることがあるそうです。」そこで百人隊長は、若者を千人隊長のもとに連れて行き、こう言った。「囚人パウロがわたしを呼んで、この若者をこちらに連れて来るようにと頼みました。何か話したいことがあるそうです。」千人隊長は、若者の手を取って人のいない所へ行き、「知らせたいこととは何か」と尋ねた。若者は言った。「ユダヤ人たちは、パウロのことをもっと詳しく調べるといふ口実で、明日パウロを最高法院に連れて来るようにと、あなたに願い出ることに決めています。どうか、彼らの言いなりにならないでください。彼らのうち四十人以上が、パウロを殺すまでは飲み食いしないと誓い、陰謀をたくらんでいるのです。そして、今その手はずを整えて、御承諾を待っているのです。」そこで千人隊長は、「このことをわたしに知らせたとは、だれにも言うな」と命じて、若者を帰した。千人隊長は百人隊長二人を呼び、「今夜九時カイサリアへ出発できるように、歩兵二百名、騎兵七十名、補助兵二百名を準備せよ」と言った。また、馬を用意し、パウロを乗せて、総督フェリクスのもとへ無事に護送するように命じ、次のような内容の手紙を書いた。

ローマの手紙 15 : 30 - 32

どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください、わたしがユダヤにいる不信の者たちから守られ、エルサレムに対するわたしの奉仕が聖なる者たちに歓迎されるように、こうして、神の御心によって喜びのうちにそちらへ行き、あなたがたのもとで憩うことができるように。

解説：

ユダヤ人は陰謀を企み、パウロを暗殺しようとしてきました。40人以上の者がパウロを殺すまで何も食べないと誓うほど、憎しみに怒り狂っていました。パウロは何年も前からローマの弟子たちと共に熱心に神様に不信な者から守られる様にと祈っていました。神様はこの祈りに「力強く」応えられました！まずパウロの甥っ子を通してこの陰謀が明らかになりました。パウロの甥っ子はどのような若者でパウロとどのような関係だったかは全く分かりませんが、神様は「想定外の人」を通して働くことができます。また神様がパウロのために用意した護衛は、歩兵200名、騎兵75名、補佐兵200名、合計475名でした。40人对475人、神様は暗殺者の計画と士気を挫きました。パウロがエルサレムで暗殺されることは神の御心ではなかったからです。まだパウロは成し遂げないといけないミッションが残っていました。

質問：

- ①神様があなたを通して成し遂げたい夢、ミッションは何ですか？
- ②何年も前から祈っていた、聞き入れられた祈りを振り返りましょう。これから何年も祈り続けたい祈りも考えましょう。

< 3日目 >

使徒 24：1－6， 10－13， 22－27（総督フェリクスとの裁判）

五日の後、大祭司アナニアは、長老数名と弁護士テルティロという者を連れて下って来て、総督にパウロを訴え出た。パウロが呼び出されると、テルティロは告発を始めた。「実は、この男は疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている者、『ナザレ人の分派』の主謀者であります。この男は神殿さえも汚そうとしましたので逮捕いたしました。」

総督が、発言するように合図したので、パウロは答弁した。「確かめていただければ分かることですが、私が礼拝のためエルサレムに上ってから、まだ十二日しかたっていません。神殿でも会堂でも町の中でも、この私がだれかと論争したり、群衆を扇動したりするのを、だれも見つかりません。そして彼らは、私を告発している件に関し、閣下に対して何の証拠も挙げることはできません。」

フェリクスは、この道についてかなり詳しく知っていたので、「千人隊長リシアが下って来るのを待って、あなたたちの申し立てに対して判決を下すことにする」と言って裁判を延期した。そして、パウロを監禁するように、百人隊長に命じた。ただし、自由をある程度与え、友人たちが彼の世話をすることを妨げないようにさせた。数日の後、フェリクスはユダヤ人である妻のドルシラと一緒に来て、パウロを呼び出し、キリスト・イエスへの信仰について話を聞いた。しかし、パウロが正義や節制や来るべき裁きについて話すと、フェリクスは恐ろしくなり、「今回はこれで帰ってよろしい。また適当な機会に呼び出すことにする」と言った。だが、パウロから金をもらおうとする下心もあったので、度々呼び出しては話し合っていた。さて、二年たって、フェリクスの後任者としてポルキウス・フェストゥスが赴任したが、フェリクスは、ユダヤ人に気に入られようとして、パウロを監禁したままにしておいた。

解説：

イエスの時代にはヘロデ王がローマの支配下で治めていましたが、この時代にユダヤに王はいなかったため、ユダヤ領域は総督フェリクスによって治められていました。カイサリアはエルサレムから北西にある首都で、ここにフェリクス総督が住んでいたため、パウロはカイサリアに護送されました。大祭司と長老の訴えは嘘に基づいていたため、告発した件は全く証拠がありませんでした。パウロの目標は裁判に勝つことではなく、裁判と監禁を通して福音を伝えることでした。総督フェリクスと妻のドルシラに大胆に信仰を伝えましたが、フェリクスは恐れ、またパウロからお金を貰おうとする下心とユダヤ人に気に入られようとしてパウロを監禁したままにしました。

質問：

①パウロの様に勇気を持って恐れの中でも、大胆に行動した事はありますか？

②今、苦難や、悲しみ・落胆・怒りなどの思い、また罪に監禁されていれば、今日誰かに告白して助けて貰って下さい。

< 4 日目 >

使徒 25 : 19 - 21 (フェストゥス総督、皇帝への上訴)

パウロと言い争っている問題は、彼ら自身の宗教に関する事と、死んでしまったイエスとかいう者のことです。このイエスが生きていると、パウロは主張しているのです。わたしは、これらのことの調査の方法が分からなかったので、『エルサレムへ行き、そこでこれらの件に関して裁判を受けたくはないか』と言いました。しかしパウロは、皇帝陛下の判決を受けるときまで、ここにとどめておいてほしいと願いましたので、皇帝のもとに護送するまで、彼をとどめておくように命令しました。」

解説：

2年の年月が経ち、新しい総督が就任しました。フェストゥス総督もユダヤ教の内紛には全く興味がなく、政治家としてユダヤ人の陰謀に協力するつもりでした。なぜならユダヤ人はお金持ちで、指導者達を味方につけることで多くのメリットがあったからです。パウロの暗殺陰謀は続いていたのでエルサレムに連れて行かれてしまうと、たとえローマの市民権を持っているパウロでも危険な状態にさらされます。パウロは覚悟を決めて、ローマ市民権保持者としての権利を主張し、皇帝に上訴しました。このプロセスは裁判を複雑にし、多額の費用を要し、更には長年投獄される可能性もありました。パウロは正当な裁判や自由を求めていたのではなく、特に皇帝に福音を伝える機会を望んでいました。「普通の伝道」では決してローマ皇帝に謁見する事はできないからです。神様のビジョンを果たすために、パウロは命がけで思い切った行動に出たのです。

質問：

- ①パウロが主張したイエスはあなたの中で今も生きていますか？あなたの主ですか？
- ②アグリッパはパウロの話を知りたいと思っていました。あなたの周りにあなたの話を聞きたい、聖書を知りたい、教会のYouTube 礼拝を聞くことに興味を持っている人はいますか？

< 5 日目 >

使徒 26 : 6 - 8, 22 - 29 (アグリッパ王への弁明と回心を語る)

今、私がここに立って裁判を受けているのは、神が私たちの先祖にお与えになった約束の実現に、望みをかけているからです。私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕え、その約束の実現されることを望んでいます。王よ、私はこの希望を抱いているために、ユダヤ人か

ら訴えられているのです。神が死者を復活させてくださるということを、あなたがたはなぜ信じ難いとお考えになるのでしょうか。

ところで、私は神からの助けを今日までいただいて、固く立ち、小さな者にも大きな者にも証しをしてきましたが、預言者たちやモーセが必ず起こると語ったこと以外には、何一つ述べていません。つまり私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると述べたのです。」パウロがこう弁明していると、フェストゥスは大声で言った。「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ。」パウロは言った。「フェストゥス閣下、わたしは頭がおかしいわけではありません。真実で理にかなったことを話しているのです。王はこれらのことについてよくご存じですので、はっきりと申し上げます。このことは、どこかの片隅で起こったものではありません。ですから、一つとしてご存じないものはないと、確信しております。アグリッパ王よ、預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」アグリッパはパウロに言った。「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか。」パウロは言った。「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになったださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」

解説：

妻ベルニケと共に現れるアグリッパ王とはアグリッパ2世であり、使徒12章でヤコブを殺したヘロデ王はアグリッパ2世の父親です。アグリッパ2世はユダヤの外のガリラヤとベレアを含むパレスチナの小さい領地の領主をしており、その所有でさえローマのお情けであると知っていました。またパウロの裁判に関しても全く権限はありませんでした。彼の代から「ヘロデ王」という名前は使われなくなりました。パウロはフェストゥス総督やアグリッパ王に大胆に福音を述べ伝え、短い時間でもクリスチャンになって欲しいと頼みます。

質問：

- ①あなたにとって神の約束の実現とは何でしょう？
- ②イエスの復活は真実で理にかなったことです。短い時間でも人は救われると祈る熱心さと必死さ、信仰はありますか？

< 6日目 >

使徒27：21－26， 33－38（ローマへの険しい道のり）

人々は長い間、食事をとっていなかった。そのとき、パウロは彼らの中に立って言った。「皆さん、わたしの言ったとおりに、クレタ島から船出していなければ、こんな危険や損失を避けられたにちがいありません。しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は

失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです。わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』25 ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります。わたしたちは、必ずどこかの島に打ち上げられるはずです。』

夜が明けかけたころ、パウロは一同に食事をするように勧めた。「今日で十四日もの間、皆さんは不安のうちに全く何も食わずに、過ごしてきました。だから、どうぞ何か食べてください。生き延びるために必要だからです。あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません。」こう言ってパウロは、一同の前でパンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始めた。そこで、一同も元気づいて食事をした。船にいたわたしたちは、全部で二百七十六人であった。十分に食べてから、穀物を海に投げ捨てて船を軽くした。

解説：

遂にローマに向け船出しますが、皇帝直属部隊の百人隊長は囚人パウロの忠告を聞かずに、船長や船首の方を信用し無謀な計画を行使しました。その結果、船は難破しますが全員無事に上陸しました。神様は、ローマに行く使命をまだ果たしていないパウロを生かしました。百人隊長も船長も高慢で強引でした。神様からの忠告に逆らうと、とんでもないことになってしまいます。

質問：

- ①航海は危険と多大な損失を伴うものでしたが、神を信頼するパウロは常に冷静でした。パウロの様に冷静に判断できた経験はありますか？
- ②危険な中で誰かを助けた事、又助けられた事がありましたか？
- ③苦難の中でも感謝の心を忘れず模範でいた兄弟姉妹を思い出してください。

< 7日目 >

使徒 28：30－31（ローマに到着）

パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。

フィリピ 4：22

すべての聖なる者たちから、特に皇帝の家の人たちからよろしくとのこと。

使徒 20：24

しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。

解説：

マルタ島に漂流された後、ようやくローマに到着することができました。パウロは兄弟たちに迎えられ神に感謝し、勇気づけられました。パウロを殺そうとするエルサレムのユダヤ人の陰謀はローマには届いていませんでした。ようやく陰謀者達から解放され、自由に主イエスについて教え続けることができました。この時点では皇帝に上訴しているので囚人ではありましたが、自由に行動することが出来ました。最後は全く自由に何の妨げもなく神の国を述べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けたと締めくくられ、パウロの使命は終わりを告げます。現在世界中に教会がありイエスの福音が自由に宣べ伝えられている事は神の奇跡です。パウロはローマ帝国によって命を奪われますが、彼は死を恐れず神様からのビジョンを全うすることを信じ戦い続けた一生でした。

質問：

- ①フィリピの手紙で具体的に誰が弟子になったのかは分かりませんが、明らかにローマの皇帝の家の方が弟子になりました！あなたの人生で最も奇跡だと感じた救いは誰でしたか？
- ②パウロは、神の恵みに感謝し売り尽くされた人生を生きました。神様はあなたにどのようなビジョン、使命、夢を与えましたか？